
世界一最低な魔法使い！

ヘル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界一最低な魔法使い！

【Nコード】

N2102T

【作者名】

ヘル

【あらすじ】

帰宅中に遭遇した悪魔の力で外道が魔法少女に！？
敵は5体の魔人＋その契約者達！
短期集中連載開始！

物語は突然に

「やあ、その君！魔法を使えるようになりたくないかい？」

ある日の下校中、私は珍妙な生き物に遭遇した。

だいぶ日が長くなったとは言え時刻はたそがれ時、妖怪か何かに遭遇してもいい時間ではある。

……が、明らかに揚力を無視した小さな翼は蝙蝠風、頭には角を生やし、小さい牙がはみ出た大きな口……所謂ところの悪魔にしか見えない生き物の提案に乗るのはいかなものだろうか？そもそもこんな生き物がいるわけがない。夢だな。

「夢なら蹴つ飛ばしても問題ないな」

「え……ちょ、待！？」

何か言おうとしていたが私は渾身の力を込めて蹴り飛ばす。

ドムッ！！

ゴムボールを蹴った様な感触が足に伝わる。遠目で見ている人がいたならばボレーシュートを打っているように見えたのではないだろうか？そのまま奇妙な生物は高速で空の彼方へ飛んでいった。

「ふむ……この感触……夢ではないのか？」

しかしやってしまったものは仕方がない、どうせろくでもないものだろう。さっさと忘れて帰宅を続行することにした。

家に帰ると妹の未来と遭遇した。未来はドブ川を見るような目を私に向けるとさっさと自分の部屋へ入っていった。

昔は慕ってくれていたのに中学生になってからはずっとこの調子だ。

私は着替えるために自分の部屋へ行くと、そこでありえない光景を目にしたのだった。

「うつつ…、いてえ、マジでいてえよおお！死ぬ！！全身の骨がバキバキになってるううう」

なんとさつき蹴り飛ばした珍奇生物が転がっていた。よく見ると窓ガラスが割れている。

「なんてことだ……ガラスを割ってしまったか」

「そうじゃねえだろうがあああああ！！」

のた打ち回る生物が全身から血をピューピュー噴出させながら突っ込みを入れてくる。まだ元気そうだ。

「着替えるから出て行ってくれ」

そう言っただけで廊下に血まみれの生物を出すと15分ほどかけて服を選び、着替え終わったあとカーペットの染み抜き（血溜りの掃除）を20分ほどして、そこから窓ガラスの応急処置を10分ほどした後に眠くなったので寝てしまった。

起きると窓の外はもう真っ暗だった。

廊下に出ると変な生き物？がまだ転がっていた。部屋から出た私を見てぼそぼそと喋っているが聞こえない。

かがんで聞いてみることにした。

「…死ぬから、回復……まほ、を……つか……くれ」

「無理」

「俺と契約すれば、無理じゃないから！！」

魔法か……特に使えなくてもいいけどこの生き物をどこかの研究者に売ればいいお小遣いになりそうだな。悪魔と契約とかろくでもないさそうだけど、何かあったら蹴り殺せばいいか。

「ひい!？」

悪魔(?)は私の心を除いたのか悲鳴を上げるが、私は契約してみることにした。

「契約してもいいけど、デメリツトあつたら殺すから」

念を押して言うておく。悪魔は首を縦にブンブン振り回すと空間に魔方陣を作り出す。

「これに……触れて、じゅも……唱えゴホツゴホ!てえ……」

呪文とか知らないけど。

そう思いつつも魔法陣に手を触れると頭の中に呪文らしき言葉が流れ込んでくる。

……どうやら私を魔法使いに変身させる呪文とその説明が頭に入ってくるらしいが、長つたらしくてめんどいので省略することにした。ちなみにネットの有料サイトのように利用規約がだらだらあつたっぽい。当然無視した。

「変身!」

全身を光が包むと同時に服がはじけとび、30歳の裸身が露になり硬質のスーツが胸、腰、肩、手足を覆っていく!髪が伸び、身長も20センチほど縮んだことがわかった時、私は嵌められたところに気がついた。

部屋に戻って姿見を見ると、そこには鎧つきの学生服のようなものを着た高校生くらいの美少女が写りこんでいた。

私の名前は佐渡秀一。さと ひでかず

『ひでえサド』と言う不名誉な愛称を持つ高校の日本史担当教諭だ。まさか30を前にして魔法少女に変身することになるとは思わなかったが……それがここまでの大事件になるとはこのときは思いもなかった。

物語は突然に（後書き）

去年怪談書いてたら私の身が大惨事に…

ちよつと馬鹿な話書いて癒されたいと思いました。

読者の方にエンターテイメントをご提供できれば幸いです。

必殺技はマスコットに

「おい、変身したがこれ私じゃ無理じゃないか？」

「え……魔法使えない？」

悪魔は頭に???? をたくさんくつつけながら考えこみ始めた。

「さっきからヒールとかいう回復魔法を使おうとしているんだが、頭の中でブーって音がする」

RPGならコマンドが灰色な感じがする。

「レベルたりないかな？ヒールって10レベルで覚える魔法なんだけど……ちよつとステータスに意識を集中してみて？」

悪魔の言うとおり意識を集中してみると私の頭の中で自分のステータスがわかった。

魔法少女サデー

LV82

HP9840

MP0

STR890

VIT900

DEX760

AGI778

INT800

MID855

LUK2

使用可能スキル

内臓破裂パンチ（内臓を確実に損傷させます）
肋骨粉碎キック（肋骨に該当する部位を粉々にします）
脳髓押し出し（脳髓を目、耳、鼻經由で噴出するほど圧迫します）
背骨折り（脊髄、脊索等の該当部位を損傷させます）

……魔法陣の効果で頭の中で説明してくれるのだが、どうやら普通の人間は成長しきって50もいけば上等らしい。

ちなみにヒールは覚ええないタイプの完全前衛型で極めて特殊な魔法少女らしい。

というかスキルであって魔法は一切備わっていないようだ。

「うん、これ魔法少女って言わないよね？」

私が一人呟くと、悪魔はさっきまで苦しんでいたのが嘘のように回復し、私に詰め寄った。

「30歳まで童貞だと魔法使えるようになるって法則があるのになんでお前魔法使えないんだよ！？魔法の国ではマジでひでえサドでその上カスすぎてドブ川みたいな奴だから確実にすごい魔法使いになるって前評判信じてきたのに！！彼女いない暦イコール年齢とも書かれてたんだぞ！？それなのにMPOってどういうことだ！？」

あー、もう！？これが多くてうるさい奴だなー。

「彼女は作ったことはないけどメス奴隷なら10人以上作ってきたからなー。そのせいじゃない？」

「メス奴隷って…全年齢対象の話の主人公のくせに……恥をしれ！！」

ちなみにこんな会話をしながらも頭の中で変身解除方法を探しているのだが、全く見つからなくて少し困っていた。

「あのさ、これどうやれば戻るの？」

「えー？戻り方教えなくてもよくね？せっかく若返れたんだしもっと楽しめば？」

あからさまに使えないお前なんかにはないんだよ、といった空気をかもし出しながら悪魔は耳を小指でほじっている。廊下に耳くそ落とすなよ。

イラっとしたその時、内臓破裂パンチのスキルが発動！

地味に悪魔にめり込んだボディブローが何かしらを潰した。

「ぎゃあああああああああああああ！！」

再び床でのたうち回る悪魔を捕まえてもう一回質問してみた。

「うつつうつつ……いてえええええ、いてえええええ……もう解除できるはずだよ……これ以上殴らないで！！」

お？どうやら戦闘が終わると解除可能になるらしい。

この悪魔、私に戦闘を挑んでいたのか…。

「えい」

とどめに踵落としを決めると

ぶじゅるる！

と、汚い音を出して悪魔は今度こそ沈黙したのだった。

必殺技はマスコットに（後書き）

マスコットに必殺技一発目をお見舞いする主人公ってどうなんでしょうね…。

強敵は飛蹴りで参上！

あー、なんか地獄にいるお母さんがこっちに手招きしてるぞー……。え？まだこっち来るなって？でもそっち逝きたいなー？？

……ハ！？

「起きろ下等生物」

ゴスー！！

何か硬い物が俺の頭にめり込む！

「し……死ぬ」

俺が言えたのはそこまでだった。

完

……遊んでる場合ではなかった。

痛いがこの人間をどうにか説得して魔王バトルに参加しなくては……！！

あてにしていた魔法使いではないけども、この戦闘力なら……！！

「ギブ……マジでギブ……そろそろ死ぬって」

しかし俺の崇高な志とは裏腹に口から出たのはギブアップ宣言だった。

Orz

マジで暴力魔法少女（魔法使えない）に心折れそうだが、俺はがんばって説得することにしたのだった。

姿勢は土下座で

「あのー、サディーさん？申し訳ないのですが、私の話を聞いてほしいのですが??」

虫でも見るような目でサディーがこっちを見下ろしてくる……。

「言えば？」

ちなみに当のサディーさんは変身解除して元の30男に戻っている。

外見だけで言うとう長身痩躯、イケメンとかいう生き物に見えるが、目が死んでいる。

腐った魚の目玉……、どぶの水みたいな目、どんよりとしていて明らかに主人公ではないカラーが見える……。

北斗の に出てくるモヒカン共より人でなし、人斬りでもこんな荒んだ目はしないだろう。

「えーとですね……単刀直入に言いますと、魔王バトルに参加してください！お願いします!!」

「だが断る」

…取り付く島もなし。

ただどこで折れる俺ではない!!

「えーと、ですね。魔王バトルつてのは、次の魔法の国の王を決めるバトルで、魔法の国の実力者5人が競争するんです」

「ふーん」

死んだ目で生返事された。

くじけそう(…)

「……で、サディーさんには残りの4人を倒してほしいんです。」

「嫌だ」

相変わらず死んだ目をしている。

というかなんでこいつこんな終わってるんだろう…。帰りたくないってきた。チクショオオオオオオオ!!

俺がくじけそうになった時、窓の外、ベランダから影が飛び込んできた!

ズドン!!

そんな音がしてサディーちゃん、もとい佐渡は黒い影の直撃を受けて隣の部屋までぶっ飛んでいったのだった。

「もう見つかったのか!？」

ぶっ飛んだ佐渡は砕けた壁と瓦礫で様子かわからない。俺の前には全身から煙を上げてとび蹴りから着地したと思われる狼男のような生き物。

今回のバトル優勝候補の一角『獣王ファング』がいた。

「なあ？……ちんたらパートナー探すより、自力で全殺した方が早いよな？これ見たらそう思わねえか？」

着地姿勢はそのままに。視線だけをこちらに向けてファングは舌なめずりをする。

……やばい、俺殺されるんじゃない？

強敵は飛蹴りで参上！（後書き）

行き当たりばったり…サイコー。テンションで生きてると幸せですね。

戦闘、闘争、逃走！

突然、横から飛んできた黒い塊に蹴り飛ばされた私は、自分の部屋の壁と廊下を体で粉碎したあと、床に転がった。

「……殺す」

そう呟いた瞬間、本日2回目の変身を果たしていた。どう考えても致命傷と思しきダメージを負ったはずだったが、変身するとHPが全快する仕様らしい。どうでもいいが、自分でやっておいてなんだが変身行程の省略というのはいかなものだろうか？

色々突っ込むところの多いご都合主義に意見はあるのだが、とりあえず今は私にとび蹴りをお見舞いしてくれた奴に仕返しをするのが先だ。

「まずは一人目！」

壁の破片が散らばる床を一蹴りして部屋に跳び戻ると、狼男？のような黒い生き物が悪魔を丸かじりしようとしていた。

私は問答無用で肋骨粉碎キックをしかける！

黒い狼男は報復の飛び蹴りが当たる寸でのところで私に気づき、ベランダまで大きく跳び退った。

チッ！

飛び蹴りはわき腹を僅かにかすっただけの不発に終わった。

「貴様、死んでいなかったのか。……うおおおお！？」

無駄にかっこつけてこっちを見る狼男は、いきなり膝を折る。

どうやらかすっただけでも肋骨が折れたらしい。地味だが使える！
「効いてるぞ、やっちゃえよ！！」

その隙に狼男の手から逃れた悪魔は私の足に隠れるように後ろに回りこむ。

ゲシ

そんな音を立てつつ踏み潰される悪魔。この感触なかなかいいな。

ゲシゲシゲシ

ひとしきり踏みにじったところで、ダメージを負っている狼男に内臓破裂パンチをお見舞いする。

ドム！

硬質なゴムを殴る感触、一瞬こちらの手首が不安になったが変身による肉体の強化はそんな不安をもとせず、狼男の内臓を潰す感触が伝わってくる。

とどめにもう一撃くれてやろうと思ったところでゼロ距離からの狼男のドロップキック！直撃する前に腕を交差して防御したものの、足がフローリングを破り埋もれてしまう。

反動でベランダの外に逃れた狼男はそのまま走って逃走していた。

こうして突然の襲撃者は去っていったのだったが……が。
「何これ？」

砕け散った壁、廊下とつながった私の部屋、床には穴が……そこにいるのは見知らぬ魔法少女。

階段を上がってきた妹の未来に目撃されまくっていた。
その場の空気が凍りつく。

「とう！」

説明を面倒に思った私は魔法少女の格好のままベランダから颯爽と逃げ去ったのだった。

……手には悪魔を握り締めて。

戦闘、闘争、逃走！（後書き）

ちまちま更新。1日目のアクセス数が今までで一番よかったかも？
励みになります。

防げ！獣王ファングのワンワン王国計画

つい面倒になって飛び出してしまった私は悪魔から情報収集をすることにした。

あの狼男、なんとか撃退できたが普通なら勝ち目はなかっただろう。あんなものが何匹もいたとしたら平穏無事な私の生活が危険にさらされてしまう。

生徒の進路相談ついでに夢とか希望をへし折ったり、新人教師の熱血君をいい感じに耗れた人間にしたり……。この日常は守らねばならないだろう。

「起きたか？」

「はうあ！？三途の川の向こうにご先祖が！！ぶぼっ、ほぶ、ぶべら！？」

寝ぼけている悪魔の頬を数発張り飛ばして目を覚ましてやる。

「起きたか？」

もう一度たずねると悪魔は首を縦に振ったのだった。

「気は進まないがお前の頼みを聞いてやろうと思う。だから詳細を教える」

さっき鏡を見てわかっていていることだが、今の私の外見はせいぜい女子高生くらいの年齢だ。すこんでも大して怖くないだろう。……外見は。だが幸いにして魔力とでもいおうか？内臓破裂パンチとかを出そうとすると手や足の周りがぼんやりと歪んで見える。これを顔に近づけながら聞いてやると悪魔は顔を引きつらせた。

「それ、怖いからやめ……ぐげあああああああ……!!」
……おつといけない、脅すつもりがつつい当ててしまった。

「すまん、詳しく聞くから話をしてくれないか？」

「いだだだだ！？話す、話しますからこれやめてえええええええ」

傍から見れば、美少女がぬいぐるみを抱いているように見えるこの光景。

だが実体は高度なヘッドロックの応用と破滅的な破壊エネルギーによる圧迫といった才能の無駄使い的な拷問だった。

辺りはすっかり夜。うっかりポリ公に遭遇すれば、この格好では補導くらいされそう。

適当な公園のベンチに座って落ち着くことにした。

「改めて自己紹介するよ、俺の名はバルだ。こう見えて爵位持ちの悪魔だ。やつと名乗らせてもらえて一安心だよ」

「あ、やっぱ悪魔なんだ」

「そこはもうちょつと驚こうよサディーちゃん……まあ、いいや。さつき来た奴は獣王ファング。俺と同じ次期魔王候補の筆頭で、他にまだ3人候補がいるんだ。全部敵で、特にファングは魔王になったら人間を全部犬にするつもりらしい」

一瞬、全世界の人間が裸で首輪に鎖をつけて四つんばいで犬を演じている光景が脳裏をよぎる。……楽しそう。

「いやいや、そうじゃなくて。本当に犬にする魔法をかけるつもりらしい」

「なん……だと!？」

私の頭の中の奴隷パークがワンワン王国に塗り替えられていく。
……うわ、つまんね!。

「どうでもいいけどあまり人の思考読まないでもらおうか」

悪魔にアイアンクローをかけながら釘を刺しておく。

「はい!」

力が本格的に入る前に良い返事をする悪魔。

「ところでお前が勝ち残ったらやはり世界征服でもするつもりなのか？」

協力するにせよこの悪魔の企みは知っておかないといけないだろう。今はこんな調子だが、一応はこいつも候補。油断はできない。

「あー、最初考えたけど面倒だし?……俺は元の姿に戻ればこの際どうでもいいかも」

イマイチ要領を得ない回答だったが、どうやら事情があるらしい。

「で、他の候補について何か情報は?」

「え、知らない」

……知つとけよ。

「ファングのワンワン王国構想は有名だし、一部では実行されてることだから、俺も知ってたけど。魔法の国……あー、めんどくさいからもう魔界って言うっちゃうね。魔界って広く世にテレビとかラジオないから情報あんまりないんだよ」

なんだかいくつもぶっちゃけトークをされてしまったが、やっぱり魔法の国じゃなくて魔界からか。

「まあ、4人全部倒せばいいか。どうせろくでもない奴しかいまい」

しかし……何ともいえない状況になったものだ。

家には帰れない。というか直るまであの部屋に戻りたくない。

そもそも何で魔法少女に変身しないといけないんだろうか？魔法使えないし。

「なあ、何で変身するのが魔法少女なんだ？もっと他にあったんじゃないのか？」

バルは目をぱちくりとさせて言った。

「え、魔王の趣味」

よし、全部終わったら魔王は殴ろう。

私はそう決めたのだった。

命名ブル男！今日からお前は友達だ！！

獣王ファングは怒っていた。

人間と侮り、手傷を負った自分の不甲斐なさに。そして人間風情の分際で自分を逃走に追いやった魔法少女サディーに。

魔界の人は相手の名前やHP、MPのバーが表示されて見える便利な機能がついています。

「おのれ、魔法少女サディー！必ず殺してやるぞ……奴よりも強力な契約者をけしかけてやる！！」

ところ変わってゲームセンターにて。

「お前が鈴木大尊か？」

「何だテメーは。ヒラメみたいな顔して誰に口聞いてやがるんだ！！」

声をかけられただけで切れた不良少年の頭はパンチパーマにそり込み。学生服は短ランとボんタンズボンといった出で立ち。この鈴木大尊は筋金入りの不良だった。

小さなころからボクシング狂の父親にボクシング漬けの毎日を送らされていた。

過酷な練習、理不尽な日課。そんな日々が反抗期で遂に爆発した大尊は父親仕込のボクシング殺法を駆使して瞬く間にこの界限最強の不良へと階段を上っていたのだった。

「誰がヒラメだ！」

殴りかかってきたヒラメの一撃は素早い。もし他の高校生が相手なら、一撃でKOだったろう。しかし、大尊はそれをスウエーで回避し、相手の上体が泳いだところで一瞬のうちに顔面に3連打を合わせると踵を返してその場を立ち去る。

ヒラメ顔は何も言うことすらできずにその場で倒れた。上半身が慣性で飛び出すところを狙っての3連撃はカウンターを3回もらうに等しい。

外は雨だった。

大尊は傘など持っていなかった。濡れながら歩く。

友達も、恋人も無しで喧嘩ばかりの毎日。今の雨は大尊の心の涙なのかもしれない。

「虚しいぜ」

大尊がそう呟くと

ワンワン、キュウーン

足元で鳴き声がした。

「お前も一人ぼっちか……風邪ひいちゃうぜ？」

大尊の足元には黒いワンコがプルっていた。そう、正しくプルプルしていた……怒りで。

『クソ魔王め！！俺が魔王になったらこのふざけた呪いを解かせてやる！！』

心の中で叫ぶファングは、しかしプルプルすることしかできなかった。

契約魔法をダウンロードしたファングはバル同様、マスコット化する呪いをかけられてしまっていたのだった。

しかも魔王の呪いゆえ自力解除は不可能。怒りがこみ上げてくる。そんなファングを抱き上げた大尊は、懷にファングをつめると

「お前……寒いのか？プルプルしてるからお前の名前はプル男な？」
フアング改め、プル男はこうして大尊に連れていかれたのだった。

そのころの佐渡家

「お母さん聞いてよ、お兄ちゃんの部屋にテロリストが入ったのよ！……え？女の子だけど夢見るなって、本当なんだからー！！」

外出している母親に電話をした未来は廊下の惨状を見てため息をつく。開け放たれた窓の外は雨。

ニャンニャン

ベランダには白に黒縞の入ったニャンコがいた。

「ハウ！？かわいい！！」

未来は無類の猫好きだった。

こうして第3の魔王候補、魔界の森の長ビヤッコは何ら苦勞することなく未来に近づくことに成功したのだった。

走れメロ…違

サディは走っていた。いや、ダッシュというのも生ぬるいくらいの全速力、強化されたサディの足は100mを5秒で駆け抜ける。はつきり言って速い！しかしそれでもまだ足りなくらいなのだ。

「サディちゃんパンツ見えてるよー！」

バルがのん気なことを言っているが

「あほか！それどころじゃないだろう！？」

サディのコスチュームはミニスカートだった。それもかなりの超ミニ。脚はハイニーソックスで露出自体はさほどでもないのだが、かなりきわどい。パンツのバックにはバルの絵がプリントされている。

「魔法少女に恥じらいは必要だと思う！」

ちなみにバルは飛んでいるため実はそこまであせていなかった。その気になればマッハ3くらい出るらしい。出すと一瞬でずたぼろになるんだけれど…。

なぜこんなにも全力疾走なのか……時間は少しさかのぼる。

雨が降ってきたところでサディは泊めてもらうことができる知人の家を訪ねていた。

片桐祥子かたぎり しょうこ

秀一のことが大好きで、よく言うことを聞いてくれる秀一自身も傲慢の調教済み彼女である。

ピンポン

「はい、どちらさまー？」

祥子が無用心にドアを開けるとそこにはサディとバルが立っていた。

ずぶ濡れの二人を見て不振がることもなく、2秒ほど止まったあと「えとー、タオルだすねー」

と、二人にタオルを渡すのだった。

祥子は所謂『天然さん』だった。おまけにナンバー1キャバ嬢でお金持ちである。

サディは祥子なら適当に丸め込めると思い、祥子のマンションを訪ねたのであった。

「はい、ジューズ入れとくねー」

ニコニコ笑顔でジューズまで出してくれる祥子。

「なあ、巻き込んでいいのか？」

悪魔のバルが見ても祥子は良い人だった。仕方ないとはいえ魔王バトルに関わらせて危険な目にあわせるのはどうなのか？ということなのだったが……。

「ん、危険な目に遭ったら遭ったで楽しいだろう？」

…サディは度々すぎだった。

「祥子、ちよつといい？」

サディが祥子を呼び止める。

「貴女、私の知り合いだっけー？名前まだ言っていないような？」

「驚かないでほしいんだけど、私は秀一なんだ。ちよつとわけがあってこんな格好をしてるんだけど、君の力を貸してくれないかい？」

じつと見つめるサディー、吸い込まれるように顔を寄せる祥子…

…。

チュー

濃密でとろけるような二人だけの時間。

たっぷり10秒は抱き合ってチュッチュしてから、二人は離れたのだった。

「あ、本当だー、ダーリンどうしたのー？」

「え……この人、チューで識別してんの！？」

納得できないバルがショッキングなものを見た顔で突っ込む。

「実は……」

サディが話すと祥子はあっさり協力することを約束したのだった。

どらこんすれいやー

「そうなんだー、すごいねー」

祥子は一般人ならすんなり納得できないだろう今の状況に何ら疑問を抱くことなく受け止めているようだ。

やはりここに来たのは正解だったな。少し甘い言葉をかけておいてやろう。

「ああ、今頼れるのが君しかいなくてね……後でいっぱい愛してあげるからしばらくここに居させてくれない？」

ほとんどホストまがいの色仕掛けをサディーの姿ですと……倒錯的な何かを感じたらしく、祥子はうつとりとしている。

チヨロイな。

私がそんなことを思っていると

ポン

と両手を胸の前で合わせた祥子が思い出したように言った。

……どうでもいいが揺れるメロンがすばらしい。危険物だから後でじっくり調べよう。

「ダーリン、祥子のお願いも聞いてくれる？」

「ん、言うてごらん？」

面倒だと思いながらも完全に笑顔で答える私。

「ありがとー、じゃあ、ちょっと外に来てー」

マンションの廊下に出ると祥子は腕を絡ませてくる。腕が胸にめ

り込んで、祥子の心臓のドキドキ音が伝わってくる。……これは危険物としか言えないだろう。改めて後でよく見る必要があるそうだ。マンシヨンの廊下とは狭くて薄暗いものだが、ここの廊下は大理石の床、照明もなんだかシャンデリアのような凝ったものが付いていて、とても広い。ちなみに祥子の部屋は億単位の値段がするらしい。

曲がり角まで歩くと、証拠は壁にはりつくようにしながらそーっと除きこむ。

「あーん、やっぱりまだいるー！！ダーリン、あの生き物どつか追っ払ってー！！」

私もそつと覗き込んで絶句する。

そこにはどう考えても居てはいけない生き物がいた。

バルも私の頭の上に乗って覗き込む……こいつまた調子こいてるな。後でしめよう。

「どうみてもドラゴンだろ」

「……うん」

私が聞くとバルが認めた。

通路の奥にはワゴン車くらいはありそうなドラゴンが寝ていた。

幸いこちらには気づいていないようだが、パツと見、体長6m、尻尾までいれたら9mくらいか……、大きく硬そうな鱗は金属光沢を放つ青、羽は折りたたまれているが広げたときの迫力は相当なものだろう。長い角は刃のようにも見える。何より牙と裂けた口が凶悪だ。

「あれって魔王候補か？」

覗き込むのをやめてバルに聞いてみる。

「魔界の猛獣だけど、候補じゃないね。魔族と魔獣は人と動物みたいな関係だよ」

人と動物……普通に真っ向勝負したら勝ち目がなさそうなフレーズに嫌な予感を覚える。

「とりあえず、あれって倒せそうか？」

「たぶん」

……どうしてあんなのがここにいるのかは謎だが、先制攻撃で倒すしかないな。

さすがにあんなのが暴れたらどうにかする自信はない。

「祥子、危なそうだから部屋の中にいてくれる？」

「はい、ダーリンよろしくねー」

のん気に言ってくれる。

祥子が部屋に戻ったのを見届けて私はドラゴンに近寄ってみた。

「とりあえず、内臓破裂ばーんち」

やる気の無いパンチだが、このスキルは触れれば発動する。

ドラゴンにも効果はあったらしい。

GAOOOOOOOOOOOOOOOO!!

ほとんど怪獣映画の叫び声をあげてこちらを滅茶苦茶にらんでいる。

……効いたけど戦闘続行可能らしい。

尻尾がバシバシとのたうつ度に大理石の床がひび割れ、シャンデリアが破片になる。

明らかに食らったら人間は肉になるだろうが、サディーに変身してるせいか大丈夫な気がした。

鞭の動きで、の軌跡を描く尻尾の連撃が私の回りを破壊していく。私は全て見て回避している。傍から見るとダンスでも踊っているように見えるだろう。ステップと体裁きで全て避ける私にドラゴンは怒りを溜め込んでいるようだ。

遂にドラゴンが本気になったらしい。ステップで避けてるうちに距離が開いてしまったのは失敗だった。

ドラゴンが口をあけると何かを発射しようとしているようだ。た。「ブレスか!？」

ドラゴンブレス、ゲームとかでおなじみの強力な攻撃だ。レーザーや火炎放射器のようなものから冷凍光線や毒とバリエーションも多い。鱗が青だからレーザーと冷凍光線が来そうだ。

べちよ

近くに着弾すると

…… どうやら一種の溶解液らしい。大理石の床に30センチくらいの穴が開いている。

吼えると同時にべちよべちよ弾を撃ってくるドラゴン。

ちなみに普段の私の髪は短い、サディーになると腰まで伸びた長い後ろ髪を一本に束ねてある。魔王とやらの趣味も筋金入りだ。元の私の容姿を一切反映させることなく、とことん趣味の姿に変身させているらしい。

ベチヨベチヨベチヨベチヨ！！

「一回逃げるぞ！」

サディーの脚力は仮面ライダー並みにあるようだ。瞬時に曲がり角まで到達。そこからエレベーターホールまでひたすらダッシュし

た。背後で大理石が溶ける嫌な音が連続して起こる。

「サディちゃんパンツ見えてるよー！」

バルがのん気なことを言っているが

「あほか！それどころじゃないだろう！？」

サディのコスチュームはミニスカートだった。それもかなりの超ミニ。脚はハイニーソックスで露出自体はさほどでもないのだが、かなりきわどい。正直スカスカして居心地が悪いが、居心地を感じるべきバベルの塔は今が無いのが救いだった。

「魔法少女に恥じらいは必要だと思う！」

また思考を読んだのか、それとも今のあられない格好についてなのかバルが抗議してくるが無視。

エレベーターホールまで駆け込んだ私は、鉄扉を閉じ、べちょべちょ弾の盾にする。

直後に重に着弾音。

一瞬で鉄扉がチーズのように穴だらけになる。

だが私の狙いは防御ではない。鉄扉のすぐ横のスペースに身を縮こまらせて隠れる。

やりすごすことが狙いなのではない、奴が近づいたところを不意打ちすることにしたのだ。どうやらあのべちょべちょ弾は撃ち始めるまでに少しタイムラグがあるらしい。避けながら音を聞いて気付いたことだが、予想が正しければインファイトは苦手な攻撃なはずだ。最初に連撃で倒しておけばよかった……。

どすどすと足音を響かせながらドラゴンが近づいてくる。

鉄扉の先に頭が出た瞬間

「必殺、脳髓押し出し！」

横合いの鉄扉の収納スペースから飛び出した私がバレーボールのトスの要領でドラゴンの下顎を押し上げ

ボチュン！

水音と共にドラゴンの脳髓が飛び散ったのだった。

自分でやっというてなんだが、このスキル危なすぎる。

絶命したドラゴンが床に倒れ伏すと、魔方陣が生まれ、紫の閃光が魔方陣をサーキットのように加速すると、ドラゴンの死体は消えていた。

「今の魔法か？」

バルにたずねる。どう見ても魔法っぽい。と言うより私のスキルって魔法じゃないだろ……。

「うん、召喚魔法で呼んだドラゴンだったみたいだね。俺も使えるよ！」

バルが空間に魔方陣を出すと

Pon！

クラッカーのような音と共に羽の生えた目玉が召喚された。バルが30センチもないくらい、目玉はこうもりの体を目玉に入れ替えたくらい。

「チーチー」

目玉は鳴くとバルから何か用事をもらったらしく、飛んでいった。

「何したの？」

「探索に出した。俺とファング以外の誰かがこの近くにいるはずだから」

今のが召喚魔法だというなら、召喚した奴がいるのだろう。まだ戦いは終わらない。

ヤンデレはSよりも強し！

数分後、バルの召喚した目玉蝙蝠、ちーちゃんが帰ってきた。

よくみるとちーちゃんには尻尾もあるらしく。尻尾の先には何故かバツタ？のような虫が捕らえられていた。

ムシャムシャ

尻尾の先にある口で虫を食べていく。

うわー、仕事してなさそう。

仕事してなさそうではあったがバルに報告をしているところから一応仕事してきたらしい。バルはちーちゃんを再び出した魔方陣で、あちらの世界に帰した。……この魔法便利そうだ。

「まずいよ、サディちゃん。祥子ちゃんの部屋に隠れてるっぽい」「何!？」

安全だと思つて部屋に居させたが、却って危険だったか……どうしたものか。

と、考えていたら祥子の方から部屋を出てきた。

「ダーリンさすがー！あの子やつつけちゃったんだねー」

出てくるなりどこかずれたことを言い出す祥子。

その言葉に私は微かな違和感を覚える。

「祥子、まだドラゴンに倒せていないから中にいて?」

「え?だって今、必殺技で倒したじゃない?」

祥子の部屋からエレベーターホールはかなり離れている。

角度的に廊下に出ないでドラゴンを視認することは不可能だし、脳髓押し出しはとも地味な見た目の技だ。炸裂音も閃光も出ないのに何で知っているのか。

「祥子、契約したのか?」

バルは横でよくわかっていないのか？首をかしげている。私は祥子の一挙手一投足を見逃さないよう、彼女を凝視していた。

「ばれちゃったかー、でもダーリンが悪いんだよー。ダーリン、祥子の他に彼女いるでしょ？祥子はこの力で他の子全員殺してダーリンのナンバーワンになるの」

祥子の気配が変わっていく。スポンジが水を吸うように闇を身にまとって行く祥子。

闇が収束すると、そこにはSMのボンテージのようなコスチュームに身を包んだ祥子がそこにいた。

紫と黒の硬質なスーツは祥子の抜群のスタイルを更に強調しつつも、鳥の羽のような装飾がかわいらしさもアピールするハイレベルなデザインセンス……魔王の趣味恐るべし！！

「待って、私に彼女なんていないよ」

誠心誠意を真心を込めて投げかけた言葉だったが

「ウソツキ！おまけにダーリンまで女の子になっちゃったらダーリンも殺さないといけないじゃない！！」

言ってることが無茶苦茶すぎる。しかし私は敢えて言うのだった。

「メス奴隷ならいるけど彼女じゃないから！！」

人間素直が一番。正直に話せばわかってくれ……。

「サディーちゃんて本当にクズだよね……。あれ思いつきり操られるし、魔王候補を倒さないとだめだよ！」

バルが冷静な突込みを入れてきた。

仕方が無い。祥子を適当に痛めつけたら魔王候補はひき肉だな。

「ダーリン、また祥子以外を見てる！！もう許さない……死んじゃえ！！」

そう言うのが早いが、祥子の前に魔方陣が展開する。

同時に8つも！！

閃光の直後に無数の化け物の頭だけがこちらの世界に出現し、それぞれがブレスを吐き散らす！！

「うおおおおおおお！？」

私は先ほどドラゴンに奇襲したスペースに隠れてそれらをやり過ぎすが、わずかでも遅れていたらこっちがひき肉になっていただろう。

プレス乱舞が炸裂した奥の壁はあっさり貫通されて外とつながっていた。

カツンカツン

祥子のハイヒールの音が近づいてくる。

祥子の追撃は止まない。

さっきのドラゴンは直線でしか攻撃できなかったようだが、祥子の召喚魔法は、任意の場所に魔獣の部位を召喚して攻撃させるものようだ。

いきなり何かの尻尾が私の背後、壁の中から打撃を加えてきた。

「ぐあ！」

トゲがついてたのか、背中をざっくり切られた。

しかし回復力の上昇がすごいせいか、数秒で塞がった。

……我ながらチートくさい体だ。しかしコスチュームの破損はそのままで、破れた背中がスースーする。

これも魔王の趣味か！？そんなことを考えていたらあちこちから爪やら牙、中には花粉とかローションとか、意味不明なものがたくさん出てきて半分からいくらった。

サデীর反射神経で半分は回避できるが、予測できないタイミングでこれを暗い続けるのはまずい！！

殺意が高い。高すぎる。というか祥子ってヤンデレだったのか。

「馬鹿なこと考えてないで作戦かんがえようよ！？」

すっかりバルが突っ込みになってしまったが、気に食わないからバルのほつたをぎゅーぎゅーと両手で引っ張りながら考える。

再び閃光とともにプレス攻撃！私は壁の出っ張りに身を隠して回避する。

直後に背後の壁から振動……、まさかこのスペースごと削る気が！？
いかん、死ぬなこれは。

割とあっさり死ぬだろうと予想した私は突然音が止んだことに気が付いた。

そつとのぞいてみると、祥子が苦しそうに膝をついていた。

「祥子……大丈夫か？」

声をかけると泣き声が聞こえてきた。

グス……ヒック……

「苦しいよー、もう嫌だよー……えーん……」

やばい、却っていじめたくなる……。

「あら、ここまでかしら？」

ん？祥子以外の声が聞こえてきたぞ？

ブレスの後の魔力の歪みでよく見えなかったが、いつの間にやら祥子の足元には黄色いヒヨコがいた。

「魔王候補だよ！」

バルが警戒して言う。

うるさいな、大体気付いていたよ。

「お前が祥子を操っていた候補だな！覚悟してもらっぞ」

私が正義の鉄槌を食らわせようと思ったら、ヒヨコはいきなり白旗を取り出して降参した。

「へ？」

私が一瞬呆けていると、ヒヨコは首をすくめるようにして首を振った。

「疲れちゃったから降参するわー」

ヒヨコがそういうと祥子の変身は解けて、そのまま倒れたのだった

魔王バトル、その真相

「さて、どうしたものか」

祥子をベッドに寝かせた私はバルと第3の候補ヒーナと顔を突き合わせていた。

「もともと乗り気じゃなかったしねー。ここに来たのはたまたまストレスMAXのこの子がいたから気まぐれでストレス発散させてあげただけだし」

ヒーナはそう言つと羽繕いをする。どう見てもヒヨコにしか見えない。

「お前も魔王になってやりたいこととかあるんじゃないのか？世界征服とかワンワン王国とか」

言っていて思った。魔王になるとどういう特典があるのだろうか？どこかのゲームみたいに願いがかなう？やたら強くなる？？色々ありそうだが……。

ヒーナは首をかしげてピヨピヨと鳴くと魔法陣から本を取り出す。

複雑な印章にほどこされたカバーの文字は私には読めない。

「魔界文字か？読めそうにない」

こう見えて私は世界中のほとんどの文字は知っている。大学時代に世界中を旅してきたから古い文字とかでなければほぼ大体みたことはあるはずだ。しかし、その私にもわからない。

「ああ、これデザインだから読むのは無理よ」

ぐは！？まさかのフェイクにはまった自分が憎い。

「魔界における詳細なる法律辞典、長いから略してマジよー。ここに出てる魔王の項目読んであげるわ」

ヒーナはまじめに読み上げた。

1つ、魔王は好き勝手に振舞ってよし。ただし3回まで。

オイ

2つ、魔王は3回勝手をした後は魔王バトルを開催しなければいけない。

マテ

3つ、魔王はレベル50以上の適当な魔族にランダムで挑戦権を与える。

……これ作った奴何考えてたんだろう。頭痛がする。

気を取り直して気になることを聞いていく。

「今の魔王っていつなったの？」

これは結構大事な話だ。魔王バトルのспанがどんなものなのかもこれにかかっている。

「そうね……、先週？」

ブッ！？

飲んでいたジュースを思わず噴出す私。

早すぎる。

「魔王のやったことって？」

これには眉間に皺をよせたバルが答えた。

「今の俺達と契約者の姿を強制的に決定したのと、魔王城内に専用メイドカフェ入れた。その後従業員を全員ノーパンノーブラに設定した」

ちょ、魔王何してるの……馬鹿だろ。

「どうしようもないな」

ウンウンとうなずく二人。

「前回のバトルってどんな感じだったの？戦闘の目安にしたいんだけど」

再びピヨピヨっと鳴いてヒーナが水晶玉を取り出す。水晶玉の中にはさまざまな天災が映っていた。

「先週の世界中の天災。全部魔王の戦闘の副作用だから」

魔王バカのくせにすご！？

「ああ、バカにハサミって感じだよ、全く……。」「
バルがお疲れモードになっている。

どうでもいいけどヒーナの召喚魔法は便利そうだ。後でやり方教わっておこう。……できるのか不明だけど。

「特に前回のバトルは猛者ばかりだったしねー。前回の参加者はみんな死んじゃったからいないし、今回は少しゆるいかもねー」

あんまり気休めにならないことを言い出すヒーナ。

改めて自分の立場に少し不安を覚えたが……きつとこれやらないといけないんだろうなーと思う自分が不思議だった。サディーの姿でいると、私のS度が下がっている気がする。本来なら祥子もヒーナもこれからお仕置きタイムだったのだが……早いところ魔王バトルを終わらせないといけなさそうだ。

「魔王もこっちに來ているの？」

ふと思つた疑問だった。先ほどの条文では魔王がやらかした場合、魔王が継続するためには自ら再び戦闘をするはずである。

正直戦いたくない相手だ。

「來てるはずよー。もっともシードだから、他の候補が残っているうちは出てこないんじゃないかしら？」

「そつか。いつそのことほっとく？」

「いや、それは無理だと思う。魔王すごい短着だから。戦闘が無かったら仕掛けてくるはず」

魔王短気て……もうこいつどうにかしてくれ。

「最後の質問、ヒーナは魔王になってやりたいこととかないの？あつさり棄権しちゃったけど」

「ああ、あたし大貴族だし、あっち帰ればあんまり不自由しないのよ。1、魔王を半殺し。2、元の姿に戻る。3、帰って寝たい。あたしの勝手ってこんなところだから。1と2は他の候補もやるでしょ？」

確かに。無駄に戦うリスクを負うくらいなら怪我しないうちに降りるのも手だろう。

「んー、ダーリンこっちきてー」

寝言で甘えてくる祥子。

「よし、今日は何か疲れたし寝るよ」

「さんせー」

「ああ、おやすみ」

二人も眠かったらしい。

祥子のベッドにもぐりこむ私。

しかしシングルサイズでは狭いため変身は解除しない。

すぐに祥子が抱きついてきて私は二つの危険物に顔を圧迫される。息苦しいが、甘い匂いと柔らかさに包まれてそのまま深い眠りに誘われていく。

ヒーナはこの辺で祥子が一番ストレスをためていたと言っていた。ナンバーワンキャバ嬢ともなればストレスのたまり具合もすごいだろう。

寝ているときくらいは優しくしてもいいかな……などと柄にもないことを考えながら祥子を抱きしめたところで私の意識はなくなった。

「ダーリン起きてー、ご飯できたよー？」

「んー、ああ今いくよ」

起きたところで変身を解除、元の高校教師、佐渡秀一に戻る。今日は普通に学校がある日だ。眠りたいところだが仕事をせねばいけない。

「おはよ」

テールではヒーナがご飯粒を食べていた。バルもおにぎりを食べている。

「あー、大丈夫かい？」

祥子はエヘッと笑いながら答える。

「うん、ちよつと暴れちゃった。ゴメンネー」

廊下を壊滅的に吹っ飛ばしておいてちよつとって…。

「あとでお仕置きだね」

うつつと目を潤ませる祥子だったがほんのり頬が赤い。どんなお仕置きを想像したのかあとで体にきいてやろう。

「どうでもいいが、ヒーナは帰らなくていいのか？」

「魔王が倒れたらばこつてから帰りたいからしばらくここにいるわー。あっちに行くと広すぎてちよつと殴りにいけるような距離じゃないからー」

魔界広いのか。

「うんうん、魔界は広いんだぜ、サデー……ぶべら!」

「いやいや、今変身してないからね。この格好の時にその名前で呼ぶなよ」

調子に乗っているバルにでこピン、否、でこクラッシュを食らわせて吹き飛ばす私。

うん、やはり調子出るね。

正直魔王バトルに不安はあるものの、私は私なりに日常を守るところを改めて決意したのだった。

人物設定、主人公とバトル関係者（前書き）

そろそろ登場人物も増えたので設定を公開！

人物設定、主人公とバトル関係者

設定

佐渡秀一Ⅱ魔法少女サディー

本編主人公。

本来は鬼畜、度外道、好きな四字熟語は阿鼻叫喚。

若い頃に世界中を旅した結果、甘やかすと碌なことがないということを知ったかわいそうな人。妹の未来とは数年会わなかったのと、帰ってきたとき、既に死んだ魚の目になっていたことから別人疑惑を持たれており、一方的に嫌われている。

世界中にメス奴隷がいる。本来の秀一を魔人が見ると職業：教師（度S皇帝）と言うものが見える。一方的に攻撃するのは大好きだが、戦闘は嫌い。相手の嫌がる顔が大好きという困った性格。この捻じ曲がった性格故に変身時の魔力がねじれており、放出、拡散系の魔法は一切使えない。

その代わり、まとわりつくこの魔力は、サディー本体に還元され続けており、異常なステータスと高い近接戦闘力を発揮する。絶えず膨張し続ける魔力を押さえ込むことで、常時ステータスは上がり続けているため、放っておくと強くなる。また、自覚していないが、相当なレベルなため、最初から強い。

ルックスについては、秀一は身長180センチ、体重70キロ、筋肉質。韓流スターのムキムキした人とかガクトとか痩せマツチヨ系の人。顔と声はいいが性格が死亡しているので良く見ればかつこいい人、印象は怖い人。

サディーに変身時は高校生くらいの美少女に変身。白ベースのブレザータイプ学生服に装甲がくつついている。一部はただの布だが、装甲部分の強度は鉄よりも高い。実は装飾部分には魔法の杖とか魔

本とかしまつてあるのだが、本人の魔力が振れているため発動不可能。ヘアスタイルは黒髪を前下がりボブカットにみせつつ、後ろ髪は腰まであり、それをリボンでとめている。デザインby魔王だけあつて、服、容姿共に相当なこだわりがあるらしい。秀一がちよつとおかしいことを差し引いても変身してしまつてどうしよう!？的な印象を抱かせないくらいに魅力的な容姿ではある。魔王の魔力で、秀一の目が死んでいる特性は目元からして死んでいる。瞳に生気が無いレベルまで押さえ込まれているため、変身していると秀一の性格が影響を受けて真人間に近づく。

バル

秀一と契約した今回の魔王バトル候補者の一人。

魔界の爵位持ち貴族で、本来はエリート家系でボンボンとして育てられた育ちの良い貴公子。おまけに美少年。

しかし、うかつにも人間界に来てすぐに契約者を見つけようと、今回のレギュレーションに合った魔法をダウンロードした結果、今のちび悪魔形態になってしまう。

数時間泣いたりわめいたり、お家に電話したりしたが、前向きに契約者を探そうとして、魔界でも有名なクス男、佐渡秀一なら変身した時に強くなると思ひ声をかけたのだった。

その結果半殺しにされるわ、ことあるごとに痛めつけられるわで可愛そうな役。

元の姿の詳細は本編未登場のため、まだ内緒。

ちなみに本来のバルの適正と、秀一の相性が合っていれば放出系の高火力魔法が使える正統派になるはずだった。悪いのは全部秀一の性格のせい。

獣王フアング

最初に現れた魔王候補筆頭の狼男。

戦闘能力が高く、特に攻撃力にすぐれる。分身、巨大狼への変身、氷の魔法、相手への精神支配と、様々な特殊能力を持っているが、正直身体スペックだけで他の候補を圧倒できると思っていたため一切の能力を使っていなかった。サディーの破壊力を侮っていたため撃退されている。

自己再生や、進化する力も持っているため、魔王候補筆頭は伊達ではない。

しかしバル同様、安易に魔王の作った契約魔法をダウンロードした結果……プル男となってしまう。

黒い毛皮に鎖、トゲの付いたショルダーガードなど、北斗の拳に出てくる世紀末覇者とかの装飾をまとっている。なお、獣人世界ではスター的な扱いでイケメンらしい。

魔界の森の長ビヤッコ

未来の前に現れたニヤンコ。かわいいので未来にあっさり近づいた。

実は魔王城のメイドカフェのメイド長。

魔王が好き勝手したせいで大被害にあった人。

今回のチャンスに魔王をボコして法を改定するつもり。

容姿は本編未登場のためまだ内緒。

知識の探求者ヒーナ

魔界でも有数の魔法に長けた鳥人族の貴族。特に多重召喚魔法や、物質転送系の魔法を得意としており、ともに戦闘すると最強候補の一角にあがる応用力のある能力を持つ。

しかし本人にやる気がない。

人間でいうと14歳くらいの少女で、好きな話題は恋愛関係。スレスマックスで半分くらい秀一のせいで病んでいた片桐祥子を見つけて恋愛話をしていたところ意気投合して契約をした。

魔王

秀一をしてダメ認定されてしまう程に終わっている。
性格が死亡。

戦闘能力は絶大かつ、センスも抜群だが、使い道をとことん誤っている。

実は現在秋葉原でグッズ漁りに忙しい外国人として行動中。
魔王バトル中は旅行のつもりらしい。

容姿はまだ内緒だが、中身とのギャップを書く日が楽しみな外見ではある。

立て大尊！父親を倒せ！

帰宅した大尊を待っていたのは父親だった。

元々ボクシングマニアのサラリーマンだった父親は、ある日プロ格闘家に転進した。

しかもキックが売りの。

大尊がぐれた原因の8割は父親のこの裏切りだった。

ボクシング最強！！

こう教わってきた大尊に対し、父親は

『え、キックの方が強くな？』

と言いだしたのだった。

「帰ったか！スパ―やるから手伝え！！」

自宅ジムに移動し、プル男を床に置いた大尊はヘッドギアとグローブをはめる。

父親はすでにファイティングスタイルだった。

身長176センチの大尊は高校生にしては高い方だったが、父親の身長は189センチ。

筋骨隆々、おまけにハゲで青黒い皮膚にギラつく眼光。

「今日こそぶつ倒してやるぞクソ親父！」

大尊は速攻でワンツ―を浴びせる。しかし、リーチの差もあり軽くないなされてしまう。ボクシングスタイルの大尊はフットワークを生かしたアウトボクサーだ。リーチは大して無いものの、脚の速さと体重移動でステップインし、集中攻撃を浴びせるそのスタイルは自分の適性を生かしていると言えるだろう。

しかしライト級程度の大尊に対し父親はス―パーヘビー級。体重にして50キロ以上は軽く違うのだ。昔はやせぎすのサラリーマン

だったはずだが、いつからこんな怪物になったのか……実は数回前の魔王バトルに参加した結果こんな風になってしまったことは大尊には知る由もなかった。

大尊が吼え、必殺の連撃を食らわせる。

当たった箇所がすさまじい衝撃を受け、父親は全身から煙を出す。

「切れがよくなったじゃないか？だがそれではスーパーヘビー級は倒せんぞ！くらえ！！」

上段回し蹴りが飛んでくるその瞬間、大尊は確かにガードしたはずだった。

ゴキヤ！！

しかしそのガードの上からの軌道を通り、蹴りは命中したのだった。

俗に言うブラジリアンキックというものだ。

大尊が目を覚ますとすぐ横のちやぶ台にはご飯が置いてあった。

ご飯には貝殻や、小石が振り掛けられている。鈴木家の主食になる根性飯である。

腹が減っては戦はできない。

大尊はそこご飯をモリモリと食べ、横でプルっていたプル男にご飯を差し出した。

「腹減ってるか？食べよ」

優しいその言葉にプル男は

「石の入った飯なんぞ食えるか！！」

と、フアングらしい声で怒鳴ってしまった。

「おお！？プル男？お前、しゃべれるのか！！頭いいな」

と、おかしい勘違いをしている大尊。

「ええい、お前の頭が悪いのだ！それになんださっきの男は！すっかり魔物化しているぞ。お前の群れはどうなっているんだ」

突っ込まずにはいられない状況だった。

そもそもフアングが大尊を契約者にしようかと思つた理由は魔力耐性が素で相当高いことからだった。どうやらあの父親が常時放出してる魔力を受けることでレベルアップを重ねていたらしい。

さっきの蹴りも、普通の人間なら昏倒ではなく即死ものであつた。「何だつて！？親父がおかしいとは思つてはいたが……プル男！お前原因がわかるのか？」

ちみっこいプル男の体を両手でがっしりホールドして振る大尊。

「触るな、下ろせ！……全く。どうみても魔物だろうが！！それも数年かけて変化してるわ！！」

ガブッと手を噛んで逃れるプル男。

「おかしいとは思つていたんだ、三度の飯より人を殴ることが大好きだつて目を輝かせていた親父がいきなりキックをやり始めたんだ………そういえばあの頃からか、親父が変なダチヨウを飼い始めたのは」

普通の家庭なら気付くだろう。しかしここは鈴木家だ、砂利とご飯を同時に食べる奴らが気付くはずもない。

「そのダチヨウが臭いな。俺が協力してやるから倒すのだ！」

「おう！！」

単純な大尊はプル男の言うことを疑いもせずにダチヨウ小屋へと向かう。

ダチヨウ小屋……とは言つたものの、その佇まいは５LDK。普通に家だ。それもでかい。

大尊のファイトマネーは億を超える。これでも安い買い物らしい。

ダチヨウ小屋には体長３mほどのダチヨウがいた。普通に考えて絶滅種のモア級である。

ダチヨウは大尊とプル男を見ると目を見開いた。

「その犬、貴様は今回の候補か？」

声は後ろからした。大尊の父親がいきなりプル男をサッカーボールキックする。

キャン！

ブロック塀に叩きつけられるプル男。

「親父、何てことをするんだ！プル男が何をしたんだ！？」

痙攣するプル男はこんなときでもプルプルしている。

「そいつは、ワシの敵だ」

今度の声はダチヨウが発した。

「くそ、親父はお前があやつっているのか？」

ダチヨウは愉快そうに喉を鳴らす。

「ここにいればいずれは魔王候補が来るだろうとは思っていたが、よもやこんなに弱いちびが来るとはなあ？ワシ自らが手を下さなくても充分そうじゃないか？」

大尊を父親が攻める、攻めるひたすら攻める！！

大尊よりも早く重く、全てが的確に急所を狙った必殺の一撃。

大尊は一瞬にしてボロボロになる。

「ふん、父親に殺されるがいい。馬鹿な魔王候補と契約などするか
らだ」

ダチヨウがさげすむように言った。

「貴様、この俺をバカにしたな……、大尊こいつらを倒すぞ！！」

瀕死のプル男が立ち上がる。大尊はそれを見て折れかけた心を奮い立たせる。

「でも、どうやったらいいんだ？」

大尊の技は父親には効かない。それは大尊自身がもっともよく知っていた。

プル男が吼えるとプル男の姿が黒く光、その光が収束した後は一匹の狼がいた。

「く、巨大化してもこの程度か……魔王めやってくれる。大尊、契約だ！受けとれい！！」

プル男改めファングが再び吼えると大尊を中心に魔方阵が展開する。

「よくわかんねえけどやってやるぜ！！」

当然脳内に響く説明の声とかは無視で契約を決めた大尊。

閃光が放たれるとそこにはヒーローが現れていた！

目覚めし狂戦士！主人公は放置プレイ

「うおおおおお！？力が漲る！！」

大尊は己の身に起きた変化に驚愕する。全身を覆う黒いインナーと一体化したプロテクターには派手なファイヤーパターン、プロテクターよりもさらに硬質なガントレット、グリーブ、首元から口までを覆う

マスク。そして何より驚いたのが、パンチパーマを当てていた髪が、ストレートの長髪、しかも金髪になっていたのだ。身長と体格も父親並とは言えないが、大幅にアップしている。

「意識を集中しろ、今のお前ならたやすく倒せるはずだ」

ファングの声を聞き、現状できることを掌握していく。

意識内に表示されるステータス

狂戦士タイソン

LVなし

HP

MP

STR 1200

VIT 1000

DEX 250

AGI 650

INT 120

MID 35

LUK 80

使用可能スキル

デンプシーロール

アッパークット

フック

フリックジャブ

ジヨルトブロー

カウンター

使用可能魔法

バースト（対象を炸裂させます。）

ハウリング（相手の行動を1瞬停止させます。）

アイスエンチャント（常に発動し、拳に氷の属性をまとわせます。）

アイシクルランス（氷の杭を手のひらに発生させます。）

アイシクルチェーン（地面を伝って相手に到達後、全身を氷の鎖で締め上げます。）

アイスコフィン（アイシクルチェーン中にアイスエンチャントで殴ることで敵を氷の棺に閉じ込めて破壊します。）

ヒール（体力と傷を癒します。）

「うお、これならいけそうだ！！親父、正気に戻ってくれ、アイシクルチェーン！！」

アイスエンチャントされた拳で地面を打ち、そこから無数の氷の蔦が父親の体に絡みつく。蔦は鎖となり父親の体を拘束した。

「甘い！」

ダチヨウの目が光った瞬間、氷の鎖が蒸発する。そしてその後には大尊の父親が変身した怪物が立っていた。

全身を青い装甲で覆われた鉄の巨人。身長は2mを超えている。

「貴様、いったい何者だ！人間と契約しておいてあのふざけた姿になっっていない理由を教える！！」

父親が変身したことからダチヨウが魔族なのは確実。しかし今回の契約魔法はダウンロードすると絶対にあのデフォルメ魔法が発動するはずなのではない、フアングの脳裏にある仮説がよぎる。

「ワシに勝てれば教えてやろう、もつともその程度の力では無理だ
がな！」

ダチヨウが吼えると父親がタイソンにタックルをかける。キック
だけでなく総合格闘技まで身につけたタイソンの父親はまさしく格
闘機械として完成されていた。

そのまま壁を貫通して、ジムまで突っ込んでいく二人。本来であれ
ば2回は死んでお釣りのくる攻撃をタイソンは気合を入れて父親を
巴投げし、なんとか危機を脱する。

受身を取りそのままの足で再接近する父親にタイソンは必殺のカウ
ンターを合わせる！

手にはアイシクルランスを発生させて。

ガシャン

陶器の碎ける音がして父親はその場に倒れた。

裏ルール発覚！主人公はまたでない！！

「親父……」

タイソンは戦闘中にヒートアップしてつい強力な技を使ってしまったことを一瞬で後悔していた。

アイシクルランスはカウンターで入った。父親の目に。

ゾブリ

と、やわらかいものを貫く感触がして、その直後に後頭部を粉碎して氷の槍は突き抜ける。

怪物化して操られていたとはいえ、父親を手にかけてしまった事実足がすくむ。

「ハハハハハ、なかなかやるじゃないか。どれ、ワシが直接相手をしてやるう」

ダチヨウはメキメキと音を立てながら父親同様の戦闘形態へと変身をする。

全身が金属でできた3mの陸戦鳥類、頭は猛禽のような凶暴さ、口の中には牙まで生やしている。ほとんど恐竜と言っていのような相手である。

「タイソン、呆けるな、よける！」

ダチヨウがタイソンに放ってきた羽を横からファングが爪で粉碎した。

「そうだとも、元々お前の父親は死んでいたしな。ワシが魔力で生きているように操っていた人形にかまけている暇はないぞ？」

そういうと加速呪文を唱えるダチヨウ。鋼鉄を凌ぐ強度の二本の

脚が地面を揺るがす爆発的な脚力でタイソンに突撃をかける。

ダチヨウはバトルマニアだった。強力な相手と戦うことが趣味のそれ以外はどうでもいいというタイプの魔族。今は自分の人形を倒したタイソンとファングを全力で叩き潰すことにしか興味がない。

「人形……だと？……じのことか？……親父のことか……！！」
怒りの爆発したタイソンは白目、筋肉は膨張し、金髪は獅子の鬣のように逆立つ。

直後に衝撃、ダチヨウの加速は音の速さを超えてタイソンへと肉弾でぶつかっていった。

ぶつかった瞬間にめり込む両足、裂ける血管、周囲の家屋のガラスが砕け散る。

黄金のオーラを発揮したタイソンはダチヨウの音速チャージを真っ向から受け止めていた。

「ちょこざいな！」

ダチヨウが受け止められたその体制から更に魔法を唱えようとしたりその瞬間

横手からくらいついたファングがダチヨウの頸椎を噛み砕いた。

「とどめだタイソン」

タイソンは至近距離からのデンプシーロールラッシュを開始する。両手にはアイシクルエンチャント、見る見るうちに全身が凍っていく。

「親父のかたき……！」

アイシクルチェーンをつなぎ、さらにアイスコフィンにしたあと、氷柱と化したダチヨウを粉砕するストレートブロー。

ダチヨウは首から上を残して粉々に粉砕されたのだった。

「……まさか、ワシを倒すとは。大尊、強くなったな」

ダチヨウは首だけで話す。

「死ぬ前に答えろ、貴様は何者だ」

ファングの予想が正しければ、今回の魔王バトルは難易度が跳ね上がる。

「ワシは前々回の候補だ。その時の魔王の提案で、こちらに残ることになった。」

「それは何故だ？」

「先代魔王のわがままだ、魔王バトルそのものを変えてやろうという意思だ。同時に強力な魔族をもっと多く参加させるということで、ワシを含め、戦いが好きな魔族は4人残っている。……もっともワシはここまでのようだ。ククク、他の3人はワシよりも強いぞ」

ファングの予想は的中していた。敵が増えている。しかも今回の魔王の魔法の影響を受けない強力なままの魔族として。

「親父は、ゾンビだったのか？」

大尊は変身を解いてダチヨウに聞く。

「ああ、奴は前回のバトルで死んでしまったのだ。幼いお前を守つてな。それからワシがお前を育てていた。いずれはワシと契約させようと思っていたが……、その狼にしてやられた」

そう言うたダチヨウの頭は風に流されて粉になっていった。

「なあ、プル男、教えてくれないか？俺はどうすればいい？」

「俺の名前はファングだ。まずはそこから覚えろ」

大尊とファングの戦いが始まった。

主人公は加虐的！（前書き）

ユニークアクセス1000名を超えました。こんな駄文ですが、お気に入りに入れて頂いている方がいて嬉しいです。物語も中盤です。サクサク読めるライトなお話にしていきたいです。

主人公は加虐的！

「げ、佐渡だ！！」

「先生来たぞー、佐藤ジャンプ隠さないとまた破り捨てられるぞ！！」

「マジあいつ性格度Sだよー」

秀一の担任を任されている3年B組では秀一がちょっとした粗を発見することからネチネチ反論できない説教を食らうことが慣例化している。

相手の弱点、触れられたくないところをいじくり回すことは秀一の特技であり趣味でもある。

高身長、美形といっても良いだろうマスクを持っているのにも関わらず、その度Sぶりからほとんどの生徒からは人気がない。その結果がサド防衛線の構築された教室である。

秀一が来た瞬間この教室は校内でもっとも真面目かつ、優秀なクラスに化ける。

隙を見ればやられるからだ。

結果、保護者からの評判は生徒に反比例していい。生徒達は自らの親に

「騙されている」

と、口を揃えて言うのだった。

「何だお前達、全部聞こえていたぞ？佐藤、ジャンプは持ってくるな、月曜に買って家で読みましょーうね……フン！」

そういうと一息に佐藤という生徒のジャンプを引き裂く秀一。

叫ぶ佐藤、慰める友人、それを見て微笑む度S。

……おかしいだろ！？

透明化の魔法で秀一のすぐ横に浮いていたバルは、ちょっとおかしい3年B組の様子に突っ込みを入れる。

見えない、聞こえないふりをしてバルを廊下に捨てた秀一は、教育もとい調教を始めるのだった。

何事もなく過ぎ放課後

「ふー、今日もようやく終わった。出てきていいよ」

最後の生徒を帰した秀一はバルに声をかける。

「ひでえサドってマジだったんだな」

今日一日の行動を観察していたバルは恐怖政治と調教を行う高校教師を初めて見たことである種の感心をしていた。魔界のうわさよりひどかった……と。

なぜバルが高校まで着いてきたかというと。

朝、ヒーナと祥子に見送られて玄関を出ようというときになってバルが注意を促してきたからだだった。

「秀一、今後現れる候補と契約者はお前に近い奴から現れる可能性が高くなるかも」

「どういうこと？」

バルはうーん、と少し考えて慎重に言葉を選びながら語る。

「たぶん、俺がお前を選んだのもヒーナが祥子を選んだのも、偶然じゃないぜ。因果の鎖って言うマジックアイテムが使われている可能性が高い。魔王ってこの魔王バトル自体も盛り上げようとしているから、家族や兄弟同士での宿命の対決とか起こるのが見たいと思うんだ」

娯楽で親しい人達を戦わせ悲劇の運命を引き起こす。聞いただけで吐き気をもよおす最低なアイテムが、因果の鎖の効果ということだ。

「ということは、私は私の日常を守るためには知り合いを倒す必要

があるわけだね」

淡々と言う秀一にバルは戸惑う。

「あのなー、倒しちゃう気なのかよ？」

そう、今の言い方はもう覚悟のできている者の言い方だった。

「ああ、敵になるなら仕方ないよね」

秀一にとって大事なのはライフスタイルであり、あくまでそこに生きる人々はお気に入りのオブジェクトというだけだ。絶対必須なわけではない。

「なあ、とりあえず学校でも戦闘になるかもしれないから俺もついていくぜー」

バルは思った。サディーちゃんの外見になると少しだけこの違和感が薄まっている気がする。普段の秀一はどこか壊れていて怖いとも。この瞬間バルの脳内では、常時サディーちゃんに変身させて外側から性格改善できないかという一大プロジェクトが進行しはじめたのはここだけの話である。

「で、怪しい奴はいたのか？」

秀一の問いにバルは顔を陰しくする。

「ああ、3人もいた。しかも一人からはファングの魔力を感じた。契約者をみつけたみたいだ」

戦いは始まった、しかし同時に終わりも見えてきている。

「こつちから仕掛けて倒してしまうのも手か」

まさかの奇襲宣言をする秀一、最早こいつは主人公と言えない。

怪しい人物のピックアップ作業をし、狙いを定めていく二人。

「変身！！よし、こいつだ。こいつから殺ろう」

サディーに変身して物騒なことを言い出す秀一。

「え、まだ明るいよ！？」

「帰宅中を襲うに決まってるだろ？」

とことん黒いことしか言わない主人公。

果たして襲うことにしたのは校長だった。

マジカルステッキ登場、ただしパールのような形！！

果たして私が襲うことにしたのは校長だった。

ゴダイタツヤ

五大達也は今月から癌で入院している前校長に代わり教育委員会の送り込んできた校長だったが、私は前々から排除したいと思っていた相手だった。息がくさい、見た目が気持ち悪い、明らかに魔物っぽい。そう、とにかくにも人間ではない印象がして嫌悪感を感じる相手だった。

「校長先生、お話したいことがあるんですけどよろしいですか？」

サデイーに変身し、女子生徒に化けると駐車場へ歩いていく校長に声をかける。

かわいい女子生徒のふりをしてこっそり暗殺作戦だ。

「ん、なんだね、言ってみなさい？」

校長が、足を止めたその瞬間

ゾワ

と、鳥肌の立つ感触がして私は高速で後ろに跳び下がった。

予感的中した。私のいた場所に無数の黒い羽が刺さっていたのだ。校長は悔しそうな顔すら見せずに話す。

「私も話をしたいと思っていたところだよ。魔王候補の契約者さん」
ばれていたか。接近して脳髓押し出しで勝負を決めてやろうと思ったのに。

「なんのことですかねー？」

一応しらばっくれてみたが、校長はのってこない。ノリの悪い校長だ。

「バトルの進行具合も気になるところだし、とりあえず手足をつぶ

してからお話といこうか？」

ねちつく言う校長は、直後に変身始める。

メキメキと骨格が変形する音、同時に皮膚がボトボトと零れ落ち、真っ白い骨が露出していき、奴の体はその骨に覆われていく。ねじれた一對の角を生やし、校長は白骨の鬼と化していた。

「おいバル、契約者っていうのは魔王の趣味で魔法少女になるんじゃないかったのか？」

そう、私と祥子はそういう変身をしていたのに目の前の校長は特撮ヒーローの怪人側の変身をしたのだ。

「わからない、けど強敵だよ！」

バルがそういうと同時に空から黒い塊が落下してくる。

それは大きなカラスだった。ただし2本のねじれた角、羽は6枚。脚は3本の化け物ガラスだった。

「はじめまして、それがしの名はグリムリパーと申します。グリムとお呼びください。突然ですが死んでいただきます」

おそらく魔王候補と思しきカラスはそういうと、黒い霧となって白骨鬼にまわりつき、なんと2段階目の変身をしたのだった。白骨鬼は黒い骨の鬼となり、背中や間接にカラスの翼を生やす。そして額の角はカラスと同じデザインで4本になっていた。

「準備完了致しました。攻めてこないようならこちらから行きますよ？」

呆氣にとられて攻めるチャンスを失ったことに気がついたのはカラス。グリムがデスサイズ、大鎌を放り投げてきてからだ。

一般にゲームやアニメで見る死神の鎌というのは、見栄えはするが実用性には疑問が残る。正面から向き合ったとき、相手の背中側に回しこんでからひき切らねば最大威力が出ないからだ。振り下ろし、横なぎ、正面から相対するには単純すぎる軌道でとても武器としては優秀とはいいいがたい……と思っていたのだが。

「ハアハアハア……、校長の癖にどれだけ校舎を破壊するつもりだよ！」

そう、奴の放つデスサイズは、本体を高速回転させて、遠心力による極大質量弾としての投擲、至近距離であれば魔力で作る真空刃で全く隙を見せなかった。その上、投擲鎌は、フルサイズの鎌なのに、召喚されているのか無数に生まれてくるのだ。

ズガンズガン！！

校舎の壁に鎌が立て続けに刺さっていく。こちらは回避するので精一杯だ。

「サディーちゃん、こっちも武器だ！意識を武器のイメージに集中するんだよ！」

横でバルが大鎌を避けながらアドバイスしてくる。

普通に考えれば魔法のステッキや、せいぜい剣、槍、弓あたりが妥当である。

しかし私の頭ではそれらは最善の武器に思えなかった。

武器か……結局頭の中に浮かんだったのは巨大な『ボールのようなもの』

であった。一種のファンタジーにして最強装備、がんばれば魔法の杖とも、一種の槍とも、ボールとも言い張れるマルチプルウェポン！

重量は……50キロくらい。サディー本体よりやや重い、筋力と運動神経でボールのようなものを構え、回転大鎌を弾き飛ばしていく。

「何ですかそれは！生意気です！！」

グリムは鎌の投擲を止め、大鎌でラッシュをかけてくる。大型武器にありがちな鈍重さはかけらもなく、まさしく猛攻である。しかし私もそのラッシュにボールのようなものを打ち合わせていく。

ガキン、ガキーン！！

と、金属同士の重い音を響かせながら戦いは続き、衝撃は地面を割り、空気を裂く。奴の刃が私を捉え、腿を、わき腹を、胸を、肩を

浅く切られるようになってきたころ。疲労はしたが、狙い通りの現象が起きた。

「馬鹿な！」

グリムの鎌が金属疲労で折れ飛んだのだった。

刃を硬質の金属にぶつけられこうなることくらいわかることだろうに。

「馬鹿はお前だ」

その隙を逃さず、飛び上がりざまにバールのようなものを腹部につき入れ、地面まで串刺しにする。

「く、こうなったら奥の手です、街ごと消し飛ばしてやります!!」

この攻撃はまずい予感がする。

「させるか!!」

バールのようなものを12本展開した私はそれぞれを取っては投げ、取っては投げを、12連続一瞬で行う。一本一本が必殺の投げ槍は、全段命中し、見事カラスのイガグリ風が完成した。

食べないけどね。

「だめだ、絶命してる」

尋問しようとしたところ、ピクリとも動かないのでバルが死亡を確認した。

「まあ、一匹減ったしいんじゃない？」

何かわだかまりはあったが、特に言葉にはならなかった。

「どうでもいいけどサディーちゃん、露出狂みたいだよ？」

さつき切られた傷はどこにもないが、服だけは切り刻まれていた。バルがハアハア言いながらこっちを凝視している。……さすがにこれは私も引く。

「こつち見るな！！」 思いっきり明後日の方向にぶん投げられるバル。

しかし、因果の鎖とやらの効果でも大した敵が出てこないものがある。校長は知った人物だったが、私的には重要ではなかった。だがこれが甘かったとするのはこの後のことだった。

魔王登場、炸裂！怒りのインフェルノブラスター

サディーとバルがグリムを倒している頃、秋葉原には一人の白人青年が買い物をしていた。

年齢は20台半ば、メガネ、そばかす、背は高いがひよろりとしていて笑顔が似合うビートルズを愛していそうな好青年に見える。

「OH、ナイス！ベリーぐつどよ！！」

片言気味にトレーディングカード屋でレアカードをゲットし

「ジャパニーズHENTAIぷりーず！！」

エロゲーコーナーでハッスルし

「びゅーていほー」

フィギュアを大量にゲットしてから次の同人ショップへ行こうとしていた彼は、突如として現れた怪人に襲撃された。

「お前、契約者だろ？僕と戦えよ」

怪人は全身を赤いローブに包み、ローブから出した右手はとげとげしい鱗に覆われた頑強そうな箆手、顔はフードで隠れて見えないが目が赤く光っている。

「OH！こすぶれ？れいやーサンデスカ？」

ところが白人青年はコスプレと勘違いしたのか、ひたすら食い下がる。

「ソレ何てきやらデスカ？ワタシにもデキル？」

イラつときたのだらう、ローブの魔人は、紫に輝く魔方陣から、いかにも強力そうな刀を取り出す。

「しらばつくれるならそれでいいけど、ここで死んでもらうから」
それだけ言うとも魔人は4人に分身し、4方向から白人青年に向かって切りかかった。

剣が刺さり、腕が飛び、体が正中線から両断され白人青年が飛び散る。

「ふん、雑魚か」

そう言ってまた一人に戻る魔人。

「NOOOOOOOO!! ジーザーッス!! ガッデエエエエエエエエエム!!」

直後に聞こえる白人青年の声。

ばらばらになったはずの彼は五体満足で、己の戦利品が今の攻撃で砕け散ったことに絶叫していた。

「ワタシのブルーアイズホワイトドラゴンが……、1/12スケールランカちゃんフィギュアが……、HENTAIゲーむが!! オマエ、ゆるしません!!」

直後に赤いローブの魔人をつかみ、滅茶苦茶な力で空に向かって投げる白人青年。

魔人は身長は180センチそこそこだが、ローブに隠れていた体格はかなりののがつしりで、本来であればとても空に向かって投げることは不可能なサイズである。

しかしあまりの速度のためにローブが空気との摩擦熱で燃え、中から赤い鱗の鎧に身を包んだ虫人間が現れていた。虫人間は、一瞬驚きこそしたが自らの羽でホバリングし、空中から連続して光弾を放ち始める。

ビルが倒壊し、無数の買い物客が絶叫を上げる中、目標地点にいた白人青年は変身をしていた。

黒い鎧、銀色の長髪はマントのように広がり、顔を覆う金属製の兜は皮膚と一体化しつつも不気味さを漂わせない。万人に聞けば必ずや剛の者、覇者、魔王、そんな言葉で表されるだろうその印象そのままの真実、魔王へと変身していた。

「これがトレカの怒り、ジェノサイドレーザー!!」かわすことは愚か、視認もままならぬ閃光が虫人間の手を切り裂く。

「よく僕に傷を負わせたな!! ぐげ!!」

瞬時に切り落とされた腕を再生した虫人間だったが、次の技に脚を持っていかれる。下ではフィギュアの恨み！と叫んでいる。

さらにH E N N T A Iゲームの怒りで羽をやられて落下し始めた虫人間は、恐怖することになる。魔王の周りには先ほどまでの攻撃の数千倍の魔力が集まっていた。

「そしてこれが同士達オタクの怒りと悲しみだ、地獄で詫びろ！インフェルノブラスター！！」

技が発動すると同時に魔王の胸の鎧から砲身がせり出し、極大の魔力をそのまま放出する。

ジェット水圧で鉄を切れるように、高圧の魔力はすべてを蹴散らす！！

空に上る紫色の地獄の業火は、虫人間を消し飛ばしたのだった。

「無粋な魔族め……どこから紛れこみやガッタンデシヨウ？」

一瞬で元の白人青年に戻った魔王は、そろそろ可愛い魔法少女に会えますねー、と気分転換して去って行くのだった。

余談だが秋葉原の町の損害は、ビル20棟、死亡752名、負傷者2000名という大惨事であった。政府は原因不明のこの大規模災害を都市ガスの爆発事故と処理した。

魔王登場、炸裂！怒りのインフェルノプラスター（後書き）

最後ノリで秋葉原壊滅しました。他意はないです。不快に思っ方が
いましたら申し訳ありません。

2人の魔法使い+1

え、何これ？

部活も終わり、家に帰ろうとしていたころ。怪物が現れたと聞いて私、佐渡未来が現場に到着したとき、すでに校長先生は殺されていた。

加害者と思しき相手は兄の部屋にいたテロリスト！

今度はボールのようなものを持っている。

幸いにしてお兄ちゃんは今授業をやっていたらしいから、生きてはいたものの何も教えてはくれなかったし、そもそもこいつが何の目的でこんなひどいことをしたのかわからない。

「テロリスト、アンタ何てことしてるのよ！！」

私が怒りのあまり、自分の危険も省みず怒鳴ったところテロリストはゆっくりとこちらを見て…目があつた瞬間とまどっているように見えた。

ヤバイかな？これって私消されちゃうかな？でもこんな奴に負けたくない。負けるってなんだろう？

頭の中を色々な言葉が埋め尽くしていく。

ニャン

そんなとき、カバンの中から泣き声がした。

え？

開けると、昨日からうちにいるニャンコが飛び出した。そのまま私の肩に駆け上がり、ニャンコが喋った。

「狭かったー！！」

昨日一晩ゴロゴロさせてニャンニャン言わせてモフモフしておいた仲である。よくなついてるけど何時の間にカバンに入っただのやら……うん、でも懷いてても普通喋らないよね。私が考えていると。

「驚かないで聞いて？あいつは魔界の犯罪者なんだ、貴方の力を貸してくれない？」

ニャンコが真面目な声音で協力要請してきた。何のことかわからないけど、テロリストの殺人犯よりニャンコの方が信用できるに決まってる！

「うん、でもどうすればいいの？あいつなんかボールみたいなもの持ってるんだよ。飛び出しちゃったけど襲われたら死んじゃうかも……」

「大丈夫、ボクと契約してくれば君に戦う力をあげるから！」
「うわー、アニメみたい。こういうことって現実にあるんだ！」

そんなことを思っていたら、テロリストの目つきが変わった。バールのようなものを私に……いや、ニャンコめがけて投げようとしている！？

とつさにニャンコをかばってうずくまる私。

「その猫捨ててくれない？」

テロリストが喋った。同い年の女の子の声にしては妙に迫力がある。怖い。

「捨てたら殺す気でしょ！！」

「うん、殺す」

こいつ頭おかしい。

「未来ちゃん、落ち着いて契約してね？ボクの魔法で強くしてあげるから」

「え？」

ニャンコから魔方陣が飛び出して私の目の前で回転、発光する。

「契約書……？ええ！？魔法使いになれるの??」

このピンチを切り抜ける力……私は手に取ることに決めた。

「テロリスト、覚悟しなさい！アンタを捕まえて警察に突き出してやるんだから！！マジカルメイクアップ！！」

変身の言葉と同時に全身を白い光が覆っていき、猫耳と尻尾が生え……え！？天使の羽がモチーフの戦闘スーツを身にまとう私。胸

元は大きく開いていて猫耳、尻尾と相まってものすごく恥ずかしくなる。

「うわ、ひでえ趣味」

テロリストがドン引きし、それでいて心底哀れむような表情で私を見て言った。

夕方の風が冷たい。

「全部アンタのせいなんだからね！ファイアボール！！」

八つ当たりで火炎球の魔法を投げつける私。手に生まれた炎を丸めてドッジボールサイズにしてもいきり投げつける。

あさつての方向に飛んでいくファイアボール。

あ……

『わああああ、理科室でガス爆発だああああ！！消せ、消火器だ！！』

校舎の中に残っていた先生や生徒が大騒ぎしている。…やっちゃった。

「アンタのせいなんだからね！！」

「ふざける！！」

テロリストが真面目に突っ込んできた。こうなったらこいつを何が何でも倒しないと私までテロリストじゃない！

「大技でしとめてやるんだから！フレイムデストラクション！！」

私の両手に生まれた光球は手を離れてテロリストの周りを高速回転しながら炎を撒き散らしていく！螺旋の炎で焼きつぶす大技がこのフレイムデストラクション……らしいが。

あら？あら？？

一個はまともにテロリストをぐるぐる回っている。しかももう一個が……

ガシャン……ズドゴオオン！！

またしても校舎の中に入ってしまう大爆発を起こす。

『キヤアアアア、増田先生が燃えている！！誰か、絆創膏もってきてー！！！！』

『あつちいいいい！』

相当な大爆発だったが、中にいた体育教師の増田先生に当たったおかげで被害はさほどでもないみたい。先生ごめんなさい。

「増田さん耐久度おかしいだろ……後で調べとこうか」

テロリストが独り言を呟いて校舎を見ている。これ最後のチャンスだわ！

「もう許さないんだから！！次の一撃は私の最強の魔法よ！くらいなさい」

「いや、これ以上学校壊したら駄目だろ」

するどい突っ込み、こいつさえいなければああああ！！

「うるさいうるさいうるさい！！テロリストなんか消えちゃえ！アトミックメギドフレイム！！」

頭の中を巡る複雑な印をトレースしていく私。私の手が印を結ぶ度に魔力が増幅していくのを感じる。あ、これなんだか気持ちいいかも。気分がフワフワ高揚してくる。まるでお酒を飲んだときみたい。……みんな死んじやえ

核融合が目の前で起きている。これを押しつぶしてテロリストにぶつければ、指向性の核の炎がテロリストを焼いて影も残らないはず。私ってばやればできる子だー

「させるか！！アイシクルチェーン！」

突然現れた黒い影、が私の目の前のリアクターマジックを瞬間冷凍する。ものすごい魔力のコントロールだ。

……は！？私今何しようとしてたの？？目の前には黒いコスチュームのかっこいい人がいて、私とテロリストの両方をにらんでいる。「お前ら魔王候補だな！魔王候補は許さない！！」

魔王候補って何のことだろう？とにかく怒ってるみたいだけど、なんかもう眠い。

あ、MPがからっぽだ。

「なんか厄介なのが出てきちゃったねー。せつかくこの子の魔法で街ごと消滅させてあげようと思ったのにさ」

え、ニャンコはいい子じゃなかったの？

「とりあえずどっちも倒すから」

テロリストはそう言っているとバールのようなものを次々に取り出しては地面に刺していく。どこにあれが入ってるんだろう？

「全部俺が倒してやる」

黒いかっこいい人も拳をボキボキ鳴らしてやる気満々みたいだ。動けない私の横にニャンコが来た。

「体借りるね」

え？次の瞬間私の意識は眠りについた。

嫉妬する主人公！かっこいいは男の子の正義！！

……校長を倒した私を目撃したのは、よりもよって未来だった。どうやら完全にテロリストと間違われているようだが、面倒なところの上ない。

「サデイーちゃん、あの子から魔力を感じるよ」

横に浮いてたバルが不吉なことを言い出す。

因果の鎖の効果はこっちか！このパターンは嫌な予感がする。未来と戦闘になる前に候補は殺してしまおう。

「魔法のバールを食らわせよう」

ちなみにデザインこそ魔法少女っぽいエングレービングがほどこされているが、このバールのような物の重量はすさまじく、はつきり言って鈍器というのも生ぬるい。釘で紙をひっかけば引き裂けるように、このバールのような物は振り回せば鋼鉄すらも同様に引き裂いてしまうだろう威力がある。未来が何かと喚いている。昔はお利口さんだったのにすっかりおバカになってしまった。

む、候補らしき猫が出てきた。殺そう。

「サデイーちゃん、相変わらず発想が危険だよ！もっとヒロインらしくしてよ！！」

バルが何か言っているがでこピンで吹っ飛ばして猫に狙いを定めたが……未来が邪魔で攻撃できない。

「その猫捨ててくれない？」

果たして返事是否だった。……いつそのこと両方というわけにもいかないのが面倒すぎる。

そうこうしてるうちに未来が変身してしまった。おまけに私でもわかるくらいの魔力を持っていながら……すさまじくコントロールがへたくそだった。

立て続けに2回校舎を破壊する未来。我が妹でなければあいつ敵

でいいよね……と、言いたくなるくらいの破壊ぶりだった。同僚の増田さんは魔力ないけどやたら頑丈だし。今度調べとこう。

なんだかまったりしてきてしまった。早くあの猫の魔王候補を殺して帰ろう。

む、未来が魔力を集中し始めた。

「もう許さないんだから！！次の一撃は私の最強の魔法よ！くらいなさい」

「いや、これ以上学校壊したら駄目だろ」

突っ込みを入れたら未来が切れた。

「うるさいうるさいうるさい！！テロリストなんか消えちゃえ！アトミックメギドフレ임！！」

明らかに危ない魔法だ。

しかしボールのようなものを突っ込んで止めようとしたところで黒いコスチュームのヒーローが現れ、鮮やかな手際で魔法を止めた。

そう、なんというかヒーローなのだ。

「ねえ、バル？魔王の趣味で私この格好なんだよね？」

「うん、そうだよ。魔王は魔法少女大好きって言ってたし」

あいつが魔法少女になってないのがムカついた。私は取り乱したり、特にサディーの姿でデメリットは感じていないが……どうせならヒーローの方が良かったのだ。

「不公平だ。あいつは絶対やつつける」

私の中で魔王関係無しにあいつをライバルにすることが確定。

それにあいつはちゃんとした魔法が使えるらしい。更にいらいる。

「なんか厄介なのが出てきちゃったねー。せつかくこの子の魔法で街ごと消滅させてあげようと思ったのにさ」

猫の魔王候補は物騒なことを言い出す。

「とりあえずどっちも倒すから」

私はそう言うのとバールのようなものを次々に取り出しては地面に刺していく。どうやらこれはいくらでも取り出せるらしい。

「全部俺が倒してやる」

ヒーローっぽい奴が気障な台詞を言った。勘に触る奴だ。猫より先にこいつに不意打ちしてやる！

「二人まとめて相手してあげるよ、かかっておいで」

私がヒーローっぽい奴に攻撃を仕掛ける寸前で未来に付いていた猫が未来と同化していた。さっきまでのハイレベルな魔王の趣味ではない、銀髪の長髪、猫耳、トラの模様、間接にはファーが巻いているが、全体的に長身になり、子供らしさが消えた。というかほぼ別人である。乗っ取られたってことだろうか？さっきの校長といい、2段変身が少し気になる。……まだ1日目……。そう、この物語は始まってから1週間経っているが、中の時間軸は1日しか経過していないのだ。話数的に折り返し地点だからといって、2段変身とかそういうのは早すぎないかな？私なんかマジカルステッキですら出てきたばかりだっていうのに！！主人公が誰かこいつらわかってないよね！！

「あんまりメタなこと言っちゃ駄目だよサデューちゃん！」

バルが頭の中まで突っ込みを入れてくる。ええい、うるさい奴だ。

「ふん、粹がるなよ、悪魔め！」

ヒーローっぽい奴が負けじと言い返す。

うわ、こいつ本当にイチイチ気障でむかつく。協力するふりをした後ろからまとめて串刺しにしてやろう。

「魔界の森の王者ビャッコに対して粹がってるのはどっちかな？」

ビャッコと名乗った魔王候補はまるで本物のトラのような咆哮を挙げるとヒーローに向かい突進していく。その手には先ほど未来が変身して使っていた高温の光球。

「アイシクルランス！」

一瞬の交錯の際にヒーローっぽい奴は氷の杭を作りビャッコの光

球にぶつける。

次の瞬間爆発！おそらく氷柱が高温に接触して水蒸気爆発を起したのだろう。ここからでは二人とも煙の中で見えない。

……見えないんだよね。

中からは、激しい攻防と小爆発音がする。時折光ったり暗くなったり、吼えたり叫んだり。まさに死闘の様相である。

重ねて言うが私は煙で見えない。完全に蚊帳の外である。

あっちも見えないよね？

ヒュン……ガスガスガス！ズドン！！ガキーン！ブシュウウウウ！！！！

手当たりしだいにボールのような物を煙の中に投げ込む私。10本ほど放り込む頃には煙が消えていた。

「ふざけたマネしてくれたね、ボクを怒らせたね！！本当に街ごと消し飛ばしてやる！アトミックバーニングストーム！！」

ビヤッコはそこら中傷だらけになりながらも、全部かすり傷ですませたらしい。吼えるのと再び先ほどの核魔法、否。更に悪化させた核魔法に集中し始める。

「そんなことさせてたまるか、アイスコフィン！」

ヒーローっぽい奴もそこら中から血を流しながらも致命傷は回避していたらしい。しかもビヤッコを止めるためにさっきよりも強烈な冷気を集めているようだ。

こいつら気に入らない。

「止められるものなら止めてみるんだね、滅びの炎をくらうがいい！！」

「止めて見せる！！」

氷の塊でビヤッコの両手を封印していくヒーローっぽい奴。それを力押しではじこうとするビヤッコ。だが、ある一定のところでお互いの魔力が干渉試合、光と光、力と力のぶつかりあいとなる。

……あー、なんか私のことかどうでもいいみたいだし？こっちも勝手にやらせてもらっわ。

走って懷に飛び込んで即死急ワンツを叩き込む私。

内臓破裂。パンチと肋骨粉碎キックのコンビネーション。

そのまま蹴り抜いてビヤッコを粉碎する。

「な！？バカな！？」

ぐしゃぐしゃになった肋骨と内臓では立っていることすらできないだろう。ビヤッコは受身を取って立ち上がろうとしたところで仰向けに倒れた。

即座に分離するビヤッコと未来。

思った通り、ビヤッコだけが瀕死になっていた。

「なんで、未来ちゃんは君の妹だろう？もう少し労わる気持ちとかないの？」

ビヤッコが不満そうに言う。

「いや、ほら結局ほぼ無傷だし？この技って中の感触わかるから、ひよっとしたら狙い撃ちできるかなーって思ったんだ」

私は正直に言っちゃった。どうもこのスキル、魔力が抜けてスキルとなっているようである。操作することができれば、任意の内臓や骨を粉碎できるらしい。

「滅茶苦茶だね……」

そう言うつとビヤッコは動かなくなる。

ヒーローっぽい奴に仕掛けようと思ったところで思わぬ相手から声がかかった。

「さすがだな。魔法少女サディー！」

そう言っで飛び掛ってきたのは黒い狼。

なんとかかわしたものの、スカートの一部を食いちぎられてしまう。

「大変だよサディーちゃん！あいつフアングとその契約者だ……」

…あとパンツ見えてるよ！！」

あいつ狼に変身できるのか！？しかも契約してても戦闘できそう。こっちのバルなんか戦闘ではまったく役立たずなんだぞ！？こいつの頭の中パンツばかりだし！

「おい、フアング！私は怒っている！！」

「怒っているのは俺の方だ、人間の分際で俺に傷を負わせた罪を償わせてやる。貴様を倒すために契約し、この狂戦士タイソンを作りあげたのだ、貴様は倒される運命なのだ！！」

怒り心頭のファング、しかし私の怒りはそれどころではない。

「なんでお前が私の契約者じゃないんだ、そのかっこいいの私と交換しろ！！」

私の言葉に全員が沈黙したのだった。

ヒーローへの憧れ

「え、ちょっと何言ってるのサデューちゃん!？」

バルが驚愕の声を上げる。

「だってフアングの方がかつこいいんだもん!！」

私は即座に言ってやった。

確かにサデューの外見は文句がない程かわいい。洗練されていると言ってもいいだろう。

魔王はいい趣味していると言える。

しかし、それとこれとは別の話なのだ。

私は小さい頃はヒーローに憧れていた。しかし勉強こそ少しはできたものの体力もなく、ひよる長いだけの少年時代をすごした私は自分ではヒーローになれないのだと諦めたものだだった。

大学生活に入り、いろいろな物を考えることができるようになった私は、私なりにヒーローになる方法を模索した。

見聞を深めると共に今まで学んだ知識を生かすため世界を旅した。ある国では井戸を掘り、またある国では地雷を撤去し、またある国では教師の真似事もした。そうして半年が経過したある日、砂漠の国で武装勢力の抗争に巻き込まれた。

両者はお互いに正義と信じ、とにかく激しく戦ったのだ。私の前で。

結果、ほぼ共倒れに近い形で彼らは引き上げていった。たくさんの屍を作って。

再び私は無力を感じた。この世は所詮暴力の前には無常だと。全て虐げ、貶め、そうした方が得なのだと理解したのに。

サデューに変身する力は実は気に入っている。魔法少女なのは困ったものだが、この力は私が昔憧れた正義の力に比肩し得るもの。しかし、目の前にほぼ本物がいる。それも敵として。

「こんな理不尽なことを許せるか!！」

私の葛藤など知らない目の前のアイツは

「おいフアング、あいつは何を怒っているんだ？」

状況がわかっていないのかフアングに聞いていたりする。

「気をつける、俺にもわからんが何かあいつは危険だ！」

しかもフアングは警戒態勢。完璧に私の方が悪役のノリだ。

「二人共許さん！！ハラワタ引きずり出してそこら中にぶちまけてやる！！」

怒りの力で魔力が暴走しているのか、今なら殺れる気がする！

「だめだよ！！そんなことしてたらますますヒーローじゃなくなっちゃうから！？」

バルが喚いているが気にしない。

こうなったらこいつらを皆殺しにして私が魔王になってやる！

私が戦闘態勢を取った時、バルのようなマジカルステッキが明滅を始めた。

???

何だか全くわからないが、魔力を流してみると……。

『モードシフト、ジェノサイド』

「？」

次の瞬間、マジカルステッキの外装が弾けとび、中から飛び出した黒い触手が私の全身に絡みつくと同時にとげが飛び出し全身に刺さっていく。触手の表面は滑らかに解けて再硬化し、全身を黒い骨のような装甲が覆っていった。

ゴキゴキ、ブチ、グジョグジョ、ゴキュゴキュ！！

「ああああああああああ！！？」

激痛がする。

刺さっただけでなく、肉を、筋を、骨を、腱を、内臓を、焼くような、全身に針を打ち込まれて雑巾絞りをかけられている。そういう痛みがする。

やがて、私の意識は失われていった。

ファングの焦り

「サディーちゃん？ねえ、どうしたの？こんなの契約にあるって聞いてないよ？ねえ、返事して？」

バルが黒い骨の塊のようになったサディーに話かけているが……すさまじく嫌な予感が俺とタイソンにはあった。

「ファング、あれは何だ？」

タイソンが視線を黒い骨の塊から逸らさずに聞いてくる。俺にもわからない。

「おそらくだが、あれは奴の魔力の暴走だ。元々奴の扱れた魔力は近接スキルとして発動していたようだが、あの武器を作りだすことで適正に合わない負担が蓄積していたのだろう」

俺は思いついたことを言ってみたが、恐らく事実もそういうことだろう。スプリングを伸ばして直線を作れば、負荷がかかる。いくなればそういうことなのだ。

魔王の契約書……今回の契約者の変身魔法のことだが、あの魔法には隠しパラメータが多すぎる。俺達魔王候補を変質させる魔法といい、今の状況も何か裏があるのではないだろうか。

そもそも魔法を使えない人間に魔法を与えるこの変身魔法という物の理屈はどうなっているのかを考えなくてはいけない。

俺の仮説としては人間共が魔法を使えないのは魔力回路がリンクされていない構造だからだろう。魔族は回路として神経に付随して機能しているわけだが、あいつらは力場を持った魔力点しか持っていない。人間のメスの方が魔力点の数は多く、オスは少ない。結果として全部つなげたときに距離に差が出ることからメスはコントロールが悪く力が強く。オスは出力こそ劣るが、コントロールはしやすいという傾向を持ち、それらはさらに個々の性質により変わっていくのだ。それらをリンクさせるために、素材として俺達魔王候補の

リンクを一部人間共に召還し、融合させることで変身させることができるのではないだろうか？これならば、魔力回路を魔法に持つていかれ縮められた際に俺自身が小さくなってしまったことと、巨大化魔法である程度のサイズに戻れたことも説明が付く。

思考が少しそれたが、あれは暴走しているだけでなく魔力回路を再構成しようとしているのかもしれない。動かない今のうちに倒してしまおう。

「タイソン、今のうちに倒すぞ、あれが動き出すのは危険だ」

契約者が魔族より強い理屈を説明するのは簡単だ。契約者と魔王候補の二人分の魔力を持っているからだ。

バル……あの悪魔系の魔族は恐らく俺も知っているある高名な貴族の息子だろう。潜在魔力は俺よりも高いはず。威力は危険だがどうも粗いサデীর攻撃は先ほどの魔族との戦いを隠れて見ていた際にわかっていた。

俺にはわかる。あいつは力を持て余している。

タイソンは直列するかのようにシンプルかつ、大きな魔力点を持っている。耐性も含めて、かみ合えば有利に戦えるはずだ。しかし再構成が済んだあとはどうなるのか想像も付かない。今のあれは蛹なのだ。

「アイシクルコフィンで纏めて凍らせてやる！！」

何本ものアイシクルチェーンを放ち、一瞬で氷柱を作り出すタイソン。

我が契約者だけあり、飲み込みが早く適切だ！

しかし次の瞬間、奴の全身を覆う背骨のようなごつごつとした突起が隆起すると、まるでチェーンソーの刃のように全身で動くのが見えた。

ガシャーン！

中まで冷気が伝わる前に破壊される標柱。

即座に走りこんだタイソンがアイシクルランスを頭に叩き込む。

俺も横手から爪の攻撃を加える！

バキ！

氷の杭も奴の強度を突破できないどころか、俺の爪まで碎けてしまっほどの強度を持っている。

「タイソン、アイスエンチャントとバーストを同時に使っんだ！」

俺は温度差攻撃で強度をぼろぼろにしてやることを提案する。脆くなったところで噛み砕いてくれるわ！

「うおお、くらえバースト！！」

気合一閃、拳に溜めた魔力をアイスエンチャントと絡めて黒い物体と化したサディーにラッシュをかけるタイソン。

拳が閃く度に小爆発を起こし、その反動で更に連撃を加えていく。

パラパラ、ミシ、ギシ、

少しずつだが黒い破片と、輝割れる音が出始める。

もう少しだ、俺は牙にシャープネスのエンチャントをかける。

しかし、次の瞬間バックステップで距離を取るタイソン。

「どうした？」

タイソンの胸には浅くはない十字傷が生まれていた。装甲で止まっているが、あと僅かで装甲を抜かれていただろう。

「動いたぞ！」

バゴーン!!

癒合していた関節や、無駄な部分を中から粉碎した奴はついに姿を現したのだった。

決着、暴走の果てに…

果たして現れたのは身長180センチ前後、手足はひよる長く、武器らしい武器も持つてはいない、しかし怒りの形相の骸骨のような仮面から伺える眼球は血走り、歯の意匠の口元からはだらだらと汚らしい涎をたらしている。全身は黒い外骨格で覆われ、各中心線には背骨のようなデザインの突起が小刻みに移動している。

「ジャアッ！」

吼えると同時にそのままの姿勢で瞬間移動。タイソンに肉薄し、瞬時に防御したタイソンを裏拳で数m弾き飛ばす。

バルは愚か、ファングですら全く目で追えない速度での圧倒的な攻撃。

再び瞬間移動をして今度はサッカーボールキック。

「がはあ!？」

吹き飛ばされるタイソン。しかも今の攻撃には肋骨粉碎キックのスキルが反映されており、2撃で戦闘不能に追い込まれてしまう。

「く、化け物め！」

ファングがエンチャントした牙で噛み付くがそのまま振り解かれて地面にたたき付けられてしまう。

まるで大人が子供と子犬をいたぶるほどの戦力差がそこにはあった。

黒い骸骨は秀一の見てきた死のイメージ、この力は圧倒的な暴力、秀一の心と魔力が一体化した結果、悪夢の怪物が生まれたのだ。

バルは心を読んだことで理解してしまった。今の秀一は、自分の今までを肯定するためだけに自らが呪ったものと同じの存在になるうとしていると。

「ファング、力を貸して！」

自己再生でダメージを修復しているファングにバルは交渉を試み

る。

「見てのとおりだ、全力でもこの様だ。俺の試算ではあと5分ないうちに全滅するぞ」

悔しそくに諦めの言葉を言うファングだが、一矢報いるために力を溜めているようだ。

「俺の力とタイソンが巨大化に使っている力をタイソンに上乘せすればあるいは今のサディーちゃんを止められるかも！」

バルの提案はタイソンの魔力回路の増幅だった。二人の魔力はまだ3割程度は残っている。存在に必要な程度遺してタイソンを強化しようというのだ。

「いいのか？ 奴を倒せる可能性が出てくるがお前は候補から転落確定だろう？」

サディーを倒し、魔力がなくなれば自ずとリタイアだ。

「いいよ、あんなのは地獄にもいないんだ。人間の心の中の怪物なんて放置しちゃだめだ！」

果たして願いが通じたのか、ファングは一瞬瞑目すると

「わかった。協力してもらうぞ！」

タイソンも瀕死状態から回復魔法で復帰する。

「おい、あの子狙われてるぞー！！」

タイソンの視点の先には、倒れた未来とビヤッコがいた。秀一は

ガシャンガシャン

と、金属音をたててゆっくり歩いていく。

「グ、ガガア？」

声にならない声で何かを発した秀一はビヤッコを拾い、食った。

ポリポリグシャボキグチュクチャクチャ。

一瞬呆気にとられていた3人は、次に未来を持ち上げ、頭から噛み砕こうとしているサディーに驚愕した。

あごが割れて、巨大な牙を展開するサディー。

「やばい、タイソンお前の魔力を増幅する、あいつを止めてくれ！」

バルが魔力をタイソンに注入し、フアングもプル男になりつつも残りの魔力を注ぎ込む。

横で起きた変化に伴い、サディーは未来を食べることを止めてタイソンへと向き直っていた。

タイソンの装甲が変わっていく。フアングのすべての魔力により、ガントレットや胸の装甲に狼の意匠がふえ、バルの魔力の影響で羽と角が増える。

「うおおおおお！くらえ化け物、クロウバイト！」

爪を巨大化させてアイアンクローの要領で頭を締め付けるタイソン。

ミシミシ、ギシ……

「グガアアアアアアア！」

そのまま翼の出力で地面にめり込ませるタイソン。

翼でさらにうまくなったボディコントロールで縦横無尽のラッシュをかけていく。

サディーの攻撃も全身の突起から放たれるチェーンエッジ、瞬間移動しながらの攻撃、強引な力攻めと、きわめて危険な技が放たれるが、タイソンは全てを凌ぎ、技を叩き込んでいく。

「終わりだあああ！インフィニットロール！」

デンプシーロールの軌道を翼の急制動で使いこなすタイソン。相手が倒れるまでひたすらバーストとアイシクルエンチャントの温度

差攻撃と衝撃をたたき続ける乱舞技が発動する。

その一撃一撃さつきまでのタイソンの倍に匹敵する破壊力でサデイーを殴る殴る殴る！

果たしてその瞬間は突然訪れた。一発が黒い装甲を砕いたのだった。

かまわず殴り続け、遂に全面が砕け散ったのだった。

肉を、骨を貫いていた装甲から伸びるトゲにズタズタに引き裂きながら地面へと放りだされるサデイー。

急いでバルが駆け寄る。

こうしてサデイーは暴走した拳句、敵であるファングの力を借りて救出されるという最低な様をさらす事になったのだった。

「とどめ、刺さないんだな」

サデイーがファングとタイソンに言えたのはそこまでだった。

「ふん、俺の力だけではなく、その小僧の力も上乘せしての勝利に意味などない。次会った時は叩き潰してやる」

プルプルしながら子犬のファングが言う。

「魔王バトルは俺が終わらせてやるから、アンタはゆっくりしててくれ」

ぶっきらばうにタイソンが言うと二人は去っていった。

暴走で魔力を使い果たしたサデイーは泥のように眠りについた。

いんたーばる

目が覚めるとまだサディーだったことに気づいた私は、そこで変身が解除できないことに気が付いた。

正確に言つとサディーではなくなるから解除はできているのかもしれない。問題は秀一に戻れないということだ。

なんだこれは！？

そう、変身を解除するには、構成されている魔力回路をばらせばいいのだということはヒーナに教わったため、戦闘、非戦闘に関わらず変身、変身解除することが可能になっていたのに。

解除したら別の外見のサディーになっていた。

長いストレートの銀髪、抜けるように白い肌はサディーのときよりもさらにきめ細かい。金色の瞳、手の爪が伸び縮みする。そして何より猫耳と尻尾……。

『なんだこれはあああああああ！？』

頭の中で絶叫がはもる。

ん？なんかもう一人いる気がする。

『どうなってるのさ、これは！？ボクの体がないよ！？』

あー……なんとなく思い出した。確かビヤッコを食べた記憶が……思い出したら気持ち悪くなった。

『ひどい！？悪魔！！人間！！うあーん！！』

頭の中でビヤッコが喚いている。

「あ、目覚めたんだねサディーちゃん！！……て誰？」

手のひらサイズまでしぼんだバルが私に困惑する。

面倒だ。

それが今日の日を指す言葉だった。

「はい、わかりましたー。伝えますねー。ダーリン、学校休校だつてー」

祥子に学校に連絡してもらったところ、どうやら昨日の戦闘被害と、校長の行方不明から、しばらく休校となるらしい。結果オーライである。

あの後、バルは未来を説得して、祥子を呼んできてくれたらしい。回収されて起きたのがさっきということになる。

「で、お兄ちゃんいつまで女の子やってるの？というか男の娘？」

未来はそこが気になるらしい。

「わからない。困ってるんだ」

私は正直に言う。そう困っているのだ。頭の中でビャッコが恨み言やら泣き言やら泣き声やらでとにかくうるさいのだ。

ヒーナがご飯粒を食べながら私に言った。

「魔王バトル終わったら、分離できるようにすればいいんじゃないかしら？」

魔界で布達して魔法医を集めて分離すればいいとのことだった。

「つまり、勝ち残らないといけないということか……」

正直、心が折れている私は魔王バトルとかどうでもよくなるところだった。もうファングが優勝でいいじゃん。とか思っているくらいに意気消沈していたのだ。

ヒーローに嫉妬して怪物化して、それでも負ける。駄目すぎる。

「ダーリン、落ち込まないで？ダーリンの弱いところも愛してるよ？」

おまけに祥子に慰められる……敗北感に追い討ちがかかる。

「まあ、しばらくすれば？俺も魔力もどるはずだしさ。その時リベ
ンジしようぜ？」

バルが能天気なことを言い出す。

「事情が事情だし？いいわ、私も協力してあげる。……何ができる
かわかんないけど」

未来も理解を示し、ヒーナもウンウンうなづいている。

『早く他の候補倒しに行つてよ！ヤダー、ここから出せー！』

約1名非協力的なメンバーがいるものの、どうやら再起せざるを
得ないようだ。

面倒だなー。

これが私の感想だった。

無題（前書き）

PV数1万突破！応援していただいている方に感謝です！

無題

「ふん、小賢しい奴だ」 路地の奥へ逃げるターゲットはこれしきのことで自分と相棒のDを撒くつもりの方だった。Dの仕事は俗に言う殺し屋だ。それも世界中に散らばるマフィア専門の。報酬は1仕事1万ドル。どんなに難易度が高かろうがDは1万ドルで確実にこなす。任務達成率120%の殺し屋、この重度の厨2病患者のような冗談のようなスペックの人間に廻り合えたことは自分にとって行幸と言えた。Dのカスタムリボルバー、レイジングブル・フォルテシモが吠える。暗殺用というよりも対物拳銃とでも言った方が正しそうなその銃はDの腕をもつてすれば命中率100%、着弾した相手のパーツを確実に吹き飛ばす。目の前を走っていた男、裏切り者らしいが、詳細はわからない相手の背中に照準が合った瞬間、男の上半身が赤い血煙となって消滅した。Dは袋を取りだし、手早く残骸を詰めると、路地の表通り、街灯の近くに待機していた組織の構成員に渡す。袋の中を確認した構成員は少しだけ気分の悪そうな顔をしながらその袋を受けとると、車に投げ込み、Dに報酬を渡す。

Dはついでに、と言って車の助手席に乗

っていた内通者をレイジングブル・フォルテシモで血煙に変えていく。懐から裏付けとなる証拠写真、通話記録等を取りだして構成員に渡すと「アフターサービスです」と笑顔を作ってみせた。構成員の顔色はいよいよもって悪い。「そのくらいにしておいたらどうだ？」少しだけ気の毒に思った自分はDの過剰なアフターサービスの続行を制止してやる。

「まさか、ジョニーが警察の犬だったとはな…何でわかったんだ？」構成員が尋ねる。Dはこの場には似つかわしくない柔和な笑顔を作ると

「掃除するの得意なんですよね」と戯れ言を言ったのだった。

圧倒的な速度と情報量で120%の仕事をしてのける殺し屋がDと

いう男だ。重ねていうがこの男に廻り合えたことは自分にとって行幸だった。人としてのDはどうかと思われるが、魔王バトルの相棒としては上々だろう。自分の名はベル。魔界屈指の軍を持つ名門に生まれた悪魔系の魔人だ。今はわけあってDの影と同化している。問題がある。Dのスペックは問題ない。自分の生まれも魔力を保証してくれるだろう。

問題はここがアメリカだということだ。

「Dそろそろ日本に行けるか？」

魔王バトルが開始されてからほとんどの候補が日本にいた。どんな相手かはわからないが、アメリカにいたもう一人も東京に行ったようだった。無精髭をナイフで剃っていたDはいてつかとぼけた声をあげると手帳を見ていく。

手帳にはデートの相手と場所、プレゼントが細かく書かれていて、なかには一日に10人相手に分刻みのスケジュールが記入されていたりする。これはほぼ全て殺しの依頼だ。ここまでハードな殺し屋もそうはいないだろう。

「そうだね、来週には全部片付くから日本に行こうか」

まだ一週間はこの仕事を一緒にしないとイケないと思うため息がこぼれてしまうが、自分は一週間という数字に妥協したのだった。

Dは日系ブラジル人だったらしい。ブラジルのシカリオ上がりの伝説的な存在、一人で組織を潰すとも、殺せないものはいないとも言われている。Dの存在はFBIのXファイルにまで残されているほどだ。何で捕まらないのかも、死なないのかも、そもそも年齢すら不明。ただ、ここ10年でDに殺された相手は数知れない。Dという組織があるという噂もあるが、この男は完全に一人だった。

「で、ベル？魔王候補っていったっけ？殺していいんだよね？」

飛行機による快適な旅を終え、狭い列車に揺られて東京に着いた早々にDが自分に問いかける。

「ああ、むしろ手加減が聞くとおもうえないが。ずいぶんとやる気だな？」

自分が確認するより早く影に手をつ込み、レイジングブル・フォルテシモを抜くD。

Dの影は自分と一体化している。影、すなわち自分の中は虚数空間となっておりDの荷物を収納しているのだが……。

レイジングブルフォルテシモの回転式弾層は9発、その一発一発が軍用ジープを一撃で走行不能にする破壊力を有している。Dはそれを抜き放つと、銃声が一つに聞こえるほどの早打ちで9発全てを隣にいたサラリーマンにぶちこんだ。

下顎が千切れ、両手足を吹き飛ばされ、頭蓋も腹も血煙に変えられながら、男は変身した。

オーガ、魔界では知能の低い魔族のなりそこないであり、極めて獰猛な亜人類である。蛮族というより、人間から見たサルやゴリラのようなものだ。食欲が満たされなければ人も魔族も共食いもなんでも良い種族。はつきりいつて下等生物だ。

「こいつは候補ではないぞ。ここにはいけない存在だ。信じられない程の下等生物だから気をつける！」

オーガは千切れた手足を再生すると、その腕で横風ぎの一撃を放つてくる。

碎けるタイル、ベンチ、ゴミ箱、駅の中はまばらに人がいるだけで、目撃者が少なくてすみそうなのは良いが……。

「どうにも分が悪そうだな？一人でなんとかできるか？」

オーガの爪の一撃をレイジングブル・フォルテシモの銃身を覆うシールドで防ぎつつ、時に蹴りを、ナイフを、次々に繰り出すD。

「格闘したら勝ちはなさそうだ。諦めて撃つとしますか」そう言うのと再び両手を影に突っ込み、レイジングブル・フォルテシモを両手に装備する。

1瞬で18連射。普通の人間なら一発で肩を壊すような銃を瞬時に撃ち、更に影から新たに二挺取り出すと36発の鋼と鉛の洗礼をお見舞いしたのだった。さすがのオーガもこれを食らっては絶命するしかなかったようだ。

「相変わらず人間技ではないな」

正直な感想を漏らす。「そうかい？」

囁くD、しかし直後に表情が険しくなる。

「どうした？」

「さすがにまずいな。今駅にいる人間、ほとんど今のやつらになっている」

Dの言葉を切っ掛けにオーガ達は変身を始めた。

いつから東京は魔界化していたのだろうか？魔王バトルに遅れたせいか事態は思わぬ展開を迎えているようだった。

無題（後書き）

感想もクレームもなんもなしに作者の暴走だけで展開を進めるこのお話。それでも楽しく読んでいただけているとしたら非常に嬉しいことです。ここから先はお話が一気に進む予定です。8万以上の作品が掲載されるこのサイトで、貴重な時間を使って私のバ力にお付き合いただいているわけですから、面白いものをお見せできたらいいなと思います。

未来を視る者

Dは走り、撃ち、殴り、また走る。撃つ撃つ跳ぶ。

四方八方からオーガのラッシュがくる中を駆け抜け、数を減らしていく。

「弾薬費がまずそうだ」

へらへらしながらいってみせるDではあるが、笑いながら言うような場合ではない。影の虚数空間から次々と代えのレイジングブル・フォルテシモを取りだし縦横無尽に駆け巡るD。一匹につき36連射の死神のキスをお見舞いして次々に葬っていくが、オーガの数は百を越えている。

キリがない。

Dは息も切らせず次々にオーガを撃ち殺していくが、あとからあとから出てくるのなんの……。ゴキブリは一匹見掛けたら……という話が人間界では常識のようではあるが、同じことを魔界ではオーガで表す。こいつらは数が多いのだ。

「ベル、一気に数を減らしたいんだが協力してくれるかい？」

Dがまた一匹のオーガを肉片に変えながら自分への協力を要請してくる。ここまでの段階ですでに30匹のオーガを仕留めている。オーガは近代兵器で完全武装した兵士が10人がかりで一匹倒せるかどうかといった程度の戦力である。やはりDは異常だ。

「もっと早く言ってくれても良かったのだがな」

そう言う自分の影をDにまとりつかせ、影のコートをまとうせ

る。

「近づく奴は自分が肉片にしてやるから攻撃に専念するがいい」

早速バカな一匹が背後から踊りかかってくる。影の槍を瞬時に生成し串刺しまみれにしたオーガを、そのまま切断し、細切れにして即死させる。Dは左右に両手をあげると次々にオーガを撃ち殺していく。ステップでかわしたオーガを自分が変化させたコート of 裾に発

生させた刃で切断、またあるオーガが飛び掛かってきたためそのまま虚数空間に取り込み、消滅させる。

10分程暴れたところでオーガを殲滅することができたようだった。「で、これどういうことだい？魔王候補以外はこっちにきていないはずでは？」

Dには魔王バトルについて包み隠さず全てをつたえてある。しかし、会場になる日本に来てみればオーガまみれである。

「自分にもわからない。候補の誰かがルール無視で人間界を征服しはじめたとは思えないな」

オーガの残骸を調べるが、元人間のようだ。よく見れば人間の頃の特徴として洋服やアクセサリを纏っている。

「どうやら人間に無理矢理オーガを合成しているようだ」
自分は事実を伝える。

「どうも厄介な相手だね。魔王バトルってもっとシンプルかとおもっていたよ」

自販機でコーヒーを買って飲むD。

そのまま自販機にレイジングブル・フォルテシモを連射する。

自販機の裏にオーガが残っていたのだ。自分は言う。

「未来予知の能力か……お前本当に人間か？」

「さあね」

Dは空き缶をゴミ箱に捨てると血塗れの東京駅を後にしたのだった。

敵は国会議事堂に在り

魔王バトル開始から一週間が経過して、東京は様変わりした。

あの日サディーに変身した私が暴走して敗北した時、同時時間帯では秋葉原の一角が消滅していた。しかもそこから更に三日の間には東京の各地でバイオハザードが起きており、一度入ると公的機関で検査に合格しなければ外に出れないといった深刻な状態と化していた。曰く、感染者は怪物に変身する。……私達が最後の候補の陰謀だと推測するまでにさほど時間はかからなかった。

地図を出し、人間三人、魔族二人、人格一人で会議を始める。

「最初の発生源はここね」

ピョピョッと泣いてヒョコ姿の魔族ヒーナがシールを取り出して貼っていく。

「つぎこつちだな」

手のひらからやややみ出るくらいまでサイズを回復した悪魔バルもシールをはっていく。次々に張られていくシールを繋げて私は敵の行動範囲を検討、一つの仮説に至る。

「敵の潜伏している可能性が高い場所はここが八割だね」国会議事堂を指す私。今やバイオハザードで国会議事堂内部は怒号が飛び交う修羅場と化している。下手に刺激しようものなら爆発すらしそうな雰囲気のある政治家がテレビには良く出ている。

残り2割は秋葉原の破壊に関する情報がどうも導線からずれているためである。別件なのか、気紛れなのか不明だが、これを考慮すると潜伏先が大幅に狂うのだった。

「これって今の日本ヤバイよね」

妹の未来が深刻な表情で言う。

「そうだね倒さないといけない相手だし、こつちから攻めよう」

「わかったー、祥子もお手伝いするー」

能天気な祥子がお手伝い宣言をしてくる。

魔王バトルの戦闘を

放棄したヒーナではあったが、大したダメージもなく、祥子も変身可能なようである。

サディで前衛、祥子が後衛をすれば高確率で敵を倒せそうだ。

『いいから早く倒してボクを自由にしろー！』

私の中にいる。ビヤツコだけが非協力的だった。

「よし、今日は国会議事堂に潜入しよう。祥子、議員のお得意様に話をつけてくれないかな？」

「はい」

こうして私達は国会議事堂に潜む魔王候補を倒すために向かってくわけだが、まさかそこであんな奴に出会うとは思ってもみなかったものであった。

邂逅！？遭遇！？因果の鎖の効果

自分とDはオーガまみれの東京駅から出ようとしたところで、妙な気配を感じて警戒を強めた。

「D、何か見えたのか？」

いつもヘラヘラとしている余裕のDにしては余裕がない。

「まずいね、外の人もほとんど今の化け物だ」

どうやら駅構内だけではなく、外部も同じ有様らしい。機内の二ユースや新聞ではバイオハザードによる警戒態勢と発表されていたがアウトブレイク状態のようだ。

観光客が出入りできるようにするな、と思ったところで妙な引っかかりを覚えた。

これだけの異状状態にも関わらず、アメリカでも全く取りざたされないばかりか、日本国内の他の地域の連中が騒がずにこれを受け入れている状態。

何らかの力が働いていると考える方が自然だろう。

認識を狂わせるスキルを持つ魔族の存在は聞いたことがある。

しかしこれだけの規模でそれができる人物となると……ただの魔王候補というわけではなさそうである。

「Dこれはひょっとすると初戦の相手は一筋縄ではいかないかもしれないぞ。私の想像が正しければ相当強力な相手だ」

Dは、何を言ってるんだ？とばかりに間抜けな表情をさらす。

「ベル、魔王候補が相手なんだぜ？一筋縄で行ってもらっても困るさ。それじゃあ楽しめない」

この状況下で楽しめないと言い出すこの感性は頼もしい限りだが、相手の戦力はDの想像の上を行くだろう。

「お前の力は信頼しているが、集中していけよ？油断すればあの世行きだ」

説教くさい忠告をしてしまったが、この先用心しておいて損はな

いだろう。

グゴアアアアア！

Dに気づいたオーガ共が殺到してくる。

「骨が折れるね」

嘯くDだったが、果たして何が骨が折れる……やら。

ひたすら殺しまくり、1時間もするころにはほぼ全てが死んでいた。血まみれのベンチに腰を下ろすと、近くの自動販売機から買ってきたコーヒーで一服をする。

「ベル、今のオーガって元人間かな？」

まるで明日の天気でも聞くノリで聞いてくるD。

「ああ、元人間だ。ああなったら戻る方法はない。パンを小麦や卵に分解することができないのと同じで、オーガ召喚の素材になれば直ることはない」

「やっぱそういうもんだねー」

この男なりに考えるところがあるのか、少し感傷的な雰囲気を感じる。

「これを使った奴を倒してやれば浮かばれるだろうさ」

この男に気休めなどいるはずもないが、なぜか言っておきたくなつた。

「あ、勘違いするなよ？これもし捕まったら懲役何年分の刑になるのかなーって考えたら鬱になったただけだ」

「安心しろ、間違いなく死刑だ」

その後もDと馬鹿なやりとりをしつつオーガを倒すうちに、自分とDは国会議事堂まで来ていた。

「D、ここで決戦か？」

「たぶんね、この建物の中に親玉がいるね」

グゴアアアアア！

何度目になるだろうかわからないくらい聞いたオーガの咆哮、しかしその耳障りな騒音は、直後に水がはじける音と同時に消えてなくなる。

「ビューティフル」

「Dー！！なぜお前がここにいる！？」

オーガを瞬時に倒した少女にDが見とれる。

だが、少女の方はDを知っているようだった。そして少女の後ろには……。

「弟よ、なぜそこにいるのだ？」

我が弟、バルがふよふよと浮いていたのだった。

元凶（前書き）

ようやく座れるようになったので執筆再開！

元凶

「D!!なぜお前がここにいる!？」

目の前にいた男は、かつて私が中東で戦乱に巻き込まれた際に助けてもらった恩人だ。

通称D。要人暗殺で来たとか冗談ばいことを言っていたが、実際に後日武装勢力の指導者が暗殺されている。

おそらく、本物の殺し屋なのだろう。

圧倒的な力で降りかかる火の粉を完全粉碎していたあの時の光景が目に見えぬ。

しかし……こいつこんな奴だったのだろうか？

「え、何で名前知ってるの？そこまで有名じゃないと思ってたけどそんなに名前売れてたかな？……君、ここは危ないよ。僕がエスコートするから安全なところまで脱出しよう」

サングラスで目こそ見えないもののあきらかに下心丸出しの表情でサデーとなっている私に対して恩を売ろうとしている。しかも必死に。

いかん……どんどん株が暴落する。

「あー……Dよ。その少女は敵だ。魔王バトルの契約者だから戦う相手だからな」

Dの足元、影の中から声が聞こえる。

おそらく、これが最後の魔王候補のはずだが……。

「バル、Dと契約してる魔王候補が最後の一人か？」

驚いた顔で硬直しているバルに確認を取る。

「うん、候補の名前はベル……俺の兄だ」

Dだけでなく候補がバルの兄とか…因果の鎖とやらの効果は本当

にあるようだ。だが、ここで重要なことを聞かなくてはいけない。

『このオーガを出しているのはお前か？』

私と影、ベルは全く同じことを聞いていた。

『違う』

そして同時に否定する。

「自分とDは少し送れたせいでイマイチ状況がつかめていないのだが……」

ベルの言いたいことはわかる。今の状況を話しておく必要があるだろう。

「君らを入れて私は5人魔王候補を知っている。バルと、ベル、そこにいるヒーナの他にフアングと、事情があつて私と同化しているビヤッコ……ただ、他にもう一人、名前は知らないけど学校の校長と同化している奴がいた」

今思うとあいつだけ他の連中と毛色が違っていた。

「ふむ、どうやら自分の推測が正しければ事態は最悪な方向に動いているようだ」

ベルは相変わらず影のままでしゃべっている。しかしこのオーガまみれの状況下でいまだに変身していないDの戦闘力はやはり恐るべきものだろう。

ここにくるまでの間に魔法の使いすぎでヒーナと祥子は休憩がいるほどに消耗している。

私自身もかなり疲れているのだが、Dはさつきからあの調子である。

はつきり言つて微塵も疲れてないように見える。

バルの実力がよくわからないけど、兄のベルの方が強いと見ていいだろう。

はつきり言つて直接戦闘は分が悪いはず。

やるなら誰かと戦つた後か、その最中に漁夫の利……。

「サデイーちゃん、ベルも心読めるからね？」

バルの一言。

「安心しろ、まだ戦う気はない。この状況に心当たりがあるからな。せめてそれを解決するまでは共闘しようと思っていたところだ」

利用したいのはお互いといったところか。

だが、こいつら二人が協力者を必要とするってことは……。

「これは魔王の仕業って見ていいのかな？」

私はこれしか思いつかなかった。街が地獄化するようなことを一魔族ではできなさそうである。

しかし私に対する答えは否だった。

「いや、この魔力は……前魔王だ」

「前なんだ」

思わず呟いてしまう。というか前魔王って生きてるんだ。てつきり前の魔王バトルで倒されてるのだとばかり……。

「うむ、前回の魔王バトルの最後に現魔王と戦闘して行方不明になっていたからな。消滅したっぽいということで終了したのだが、まさか生きていたとは。おそらくお前達が遭遇した毛色の違う魔族は奴が改変したルールで残っていた前回以前の候補だったのだろう」

うわー……なんか私達の知らないところで色々あったんだ。

「ということとは、まだ敵が増える？」

「それはないだろう。おそらく前魔王自らが動かざるを得ない状況になったからこそ東京を魔界化しているのだろう」

どんどん回収されていく主人公に関係ないフラグってどうなのだ

ろうか。

「そんなことより、これが片付いたら一緒に東京観光しないかい？」
空気を読まないDは私を口説き続けている。

変身！

体の魔力を無理矢理駆使して私は一瞬だけ元の姿を取り戻す。
即座にサディーに戻されてしまう。

これは少し練習してできるようになったことだが、はっきり言うて向いていないらしく、すぐに解除されてしまう。

「ブボ！？お前、ヒデカズか！？」

噴出してサングラスを落としたDにベルが冷静な解説を行う。

「うむ、契約者は変身できるのでな。こいつはおそらく魔力で今の姿に変身しているのだろう」

解説ありがとう。というかDよく私のこと覚えていたな。

「なんてことだ……ヒデカズ、俺とお前の仲じゃないか、その姿ならぜんぜんOKだ。終わったら二人で朝まで語り合おうじゃないか」
ゾゾゾつと背筋に寒気が走る。こいつなんでもありか！？

「まあ、埒が明きそうにないしな。さっさと倒そう」

ベルがそう言うのと影が變形し、国会議事堂を指した。

いよいよ中に突入か……。中にはいっぱいオーガがいるのだろう。

……30分後。

えー、オーガいっぱいいたので省略しました。一緒に来ていた祥子とヒーナは召還魔法の撃ちすぎで床でお休み中。Dは相変わらず、こついで二丁拳銃でオーガを圧倒。私は物理攻撃だけで虐殺しました。

……だつてずっとパンチとキックしてるだけで疲れただけだし…。
飛ばしても問題ない……はず？

パチパチパチ

そんな私達に拍手を贈る男が一人。

総理大臣 馬韓 直人 《ばかん なおと》がそこにいた。

「結構な数のオーガを召還したから、もう少し時間がかかると思ったのですが…まさか候補同士で協力してくるとは……今回はイレギュラーばかりですね」

笑顔に見えるが私は目を見て驚いた。

こいつの目は何も見ていない。

「茶番はここまでだ。今回の魔王バトルにはお前が出る枠はない」
ベルが言い切る。

「そうですね……ただ、皆さんが死んでしまったら自動的に候補ゼロ、私とあいつが戦うチャンスが生まれると思うんですね」

つまり、こいつは魔王バトルに自分が参加するためだけに、東京を魔界化し多くの人をオーガの生贄にしたということらしい。

「バル、D、こいつは絶対倒すぞ！」

私の怒りの声と共に戦闘が始まった。

元凶（後書き）

残り10話ほどでこの物語は終了します。ちまちま進めていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102t/>

世界一最低な魔法使い！

2011年6月16日20時40分発行